A photograph of two young girls walking through a long, narrow tunnel. The tunnel is constructed from a series of metal poles supported by concrete blocks, and the interior is densely packed with numerous colorful paper lanterns in various shapes and colors, including red, yellow, blue, and green. The girls are walking towards the camera, smiling. The girl on the left is wearing a white sweater with brown bear patterns and white pants. The girl on the right is wearing a reddish-brown top and green pants. The background is slightly blurred, showing other people in the distance.

令和5年度
江戸川区 × 東京藝術大学
連携事業実施報告書

はじめに：『ともにアート』プロジェクトの目指すもの

江戸川区と東京藝術大学は、令和5年度より連携事業『ともにアート』プロジェクトをスタートしました。東京藝術大学は現在、令和4年に就任した日比野克彦学長のもと、芸術を社会に開き、人びとにより身近なものにしながら、より良き社会の実現のためにアートの力を積極的に活用する様々な試みを行っています。アートは人間の生きる力の根幹であり、いまここにはないものをイメージする力であり、それを実現して人びとの心をつなげていく力です。

このアートの力を、江戸川区が目指す共生社会「ともに生きるまち」の実現に生かしていこうというのが『ともにアート』の目的です。

今年度は、今後の事業の下地づくりを主眼として、斉藤猛区長と日比野学長らが登壇したシンポジウムや、多世代交流を目的としたワークショップ、本報告書のメインコンテンツである区内の文化団体の調査などを行いました。また令和7年1月から（予定）旧第二松江小学校の一部を活動拠点として使用できることとなり、その準備も進めています。

次年度以降、これらの活動・調査を下地にしながら、ワーキングチームをつくり、中長期計画を具体的に立て、おもに子育て世代の文化芸術活動に携わる人たちを支援する活動拠点（アートコモンズ）を区内に設けることを視野に入れて活動していきます。子育て世代が生き生きクリエイティブな活動に従事できる場を核として、住みたくなるまち、住みやすいまち、つながりのあるまち、文化を発信できるまちにしていく——『ともにアート』プロジェクトでは、そうしたことを区民の皆さまとともに実現したいと望んでいます。

（藤崎圭一郎／東京藝術大学デザイン科教授、『ともにアートプロジェクト』研究代表）

本報告書について

江戸川区と東京藝術大学連携事業『ともにアート』プロジェクト初年度である令和5年度は、まず4～8月に本プロジェクトの協議・準備期間として江戸川区内の視察・踏査及び斉藤区長との面談を行った。11月には連携事業の趣旨を区の内外に発信すべくキックオフシンポジウムを開催し、江戸川区 斉藤猛区長と東京藝術大学 日比野克彦学長によるトークセッションを行った。また、次年度以降の事業展開を視野に、以下大きく3つの取り組み：①江戸川区で活動する文化団体へのアンケート調査及びヒアリング調査、②共育プラザ一之江・なごみの家一之江の共同による多世代交流ワークショップ、③旧第二松江小学校の改装プランづくりを実施した。

本報告書では、本年度実施した内容をまとめ、報告するとともに、調査を通して課題として浮かび上がった点を踏まえ、次年度へ向けた提言を行う。

目次

はじめに：『ともにアート』プロジェクトの目指すもの	1
<u>1. 連携事業 初年度の実施概要</u>	4
1-1. 実施スケジュール	4
1-2. 実施概要	5
<u>2. キックオフシンポジウム 実施報告</u>	15
2-1. 第1部：齊藤区長と日比野学長による 『ともにアート』に関するトークセッション	16
2-2. 第2部：日比野学長による公開・ご用聞き	26
<u>3. 多世代交流ワークショップ 実施報告</u>	27
<u>4. 旧第二松江小学校改装の概要と方向性</u>	32
<u>5. 文化団体へのリサーチ 結果と考察／次年度へ向けた提言</u>	33
5-1. 文化団体代表者へのアンケート調査 概要と結果	34
5-2. 文化団体会員へのアンケート調査 概要と結果	43
5-3. 文化団体代表者へのヒアリング調査 概要と結果	48
5-4. 考察：次年度以降へ向けた提言	56
おわりに：次年度に向けて	59

1. 連携事業 初年度の実施概要

1-1. 実施スケジュール

江戸川区×東京藝大『ともにアート』プロジェクト事業の初年度にあたる本年度は、まず4～8月に本プロジェクトの協議・準備期間として江戸川区内の視察・踏査及び斉藤区長との面談を行った。11月には、プロジェクトの始動を記念したキックオフシンポジウムを開催した。また、次年度以降の事業展開を視野に入れ、以下大きく3つの取り組みを行なった。①江戸川区で活動する文化団体へのアンケート調査及びヒアリング調査、②共育プラザ一之江・なごみ家の一之江の共同による多世代交流ワークショップ、③旧第二松江小学校の改装プランづくり。

各々の実施スケジュールは以下のとおりである。

	2023年										2024年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
協議・準備期間	←————→												
日比野学長による御用聞き						↔							
キックオフシンポジウム							←————→						
文化団体代表者へのアンケート調査								←————→					
文化団体代表者へのヒアリング調査									←————→				
文化団体会員へのアンケート調査										←————→			
多世代交流ワークショップ										←————→			
旧松江第二小学校改装計画づくり												←————→	

1-2. 実施概要

(1) 協議と準備

〈オリエンテーションと視察〉

4月10日：

文化振興係による藝大側へのオリエンテーション（於：グリーンパレス）及び江戸川区文化施設視察（グリーンパレス、しのぎき文化プラザ、タワーホール船堀）。

（東京藝術大学参加者）

美術学部デザイン科

藤崎圭一郎教授

佐々木里史テクニカルインストラクター

丸山素直テクニカルインストラクター

共創の場（社会連携センター）

伊藤達矢特任教授

青志津男知財プロデューサー

森淳子特任講師（URA）

社会連携課

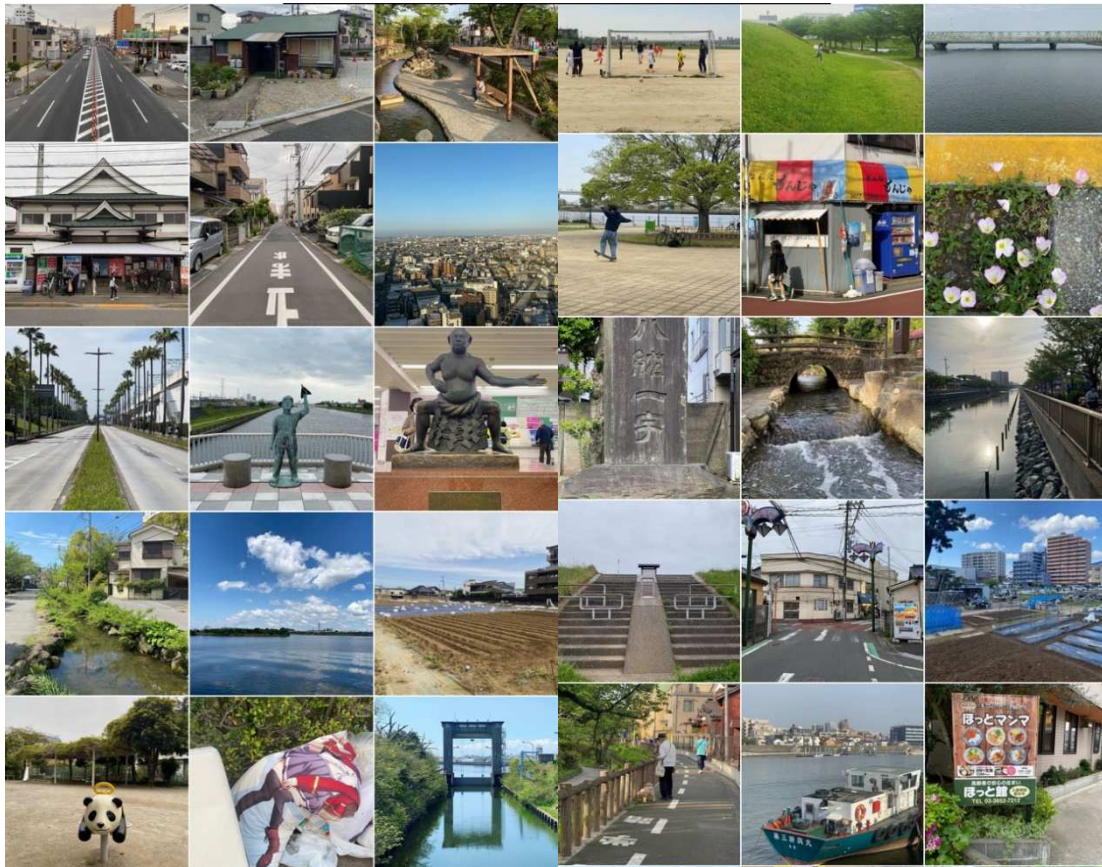
神永彰社会連携課長

福居季子社会連携課社会連携係長

〈フィールド調査〉

4月中旬～6月：

藤崎圭一郎教授による江戸川区内踏査リサーチ。4月から6月の間の計8日間、午前から夜まで江戸川区内ほぼ全域を徒歩で調査する。



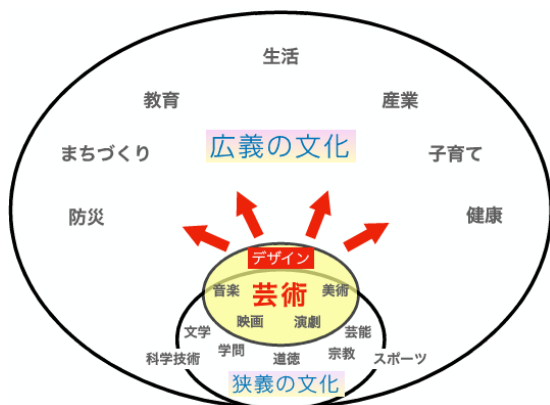
調査時に撮影した江戸川区のランドスケープ

〈齊藤区長へのプレゼンテーション〉

6月27日：

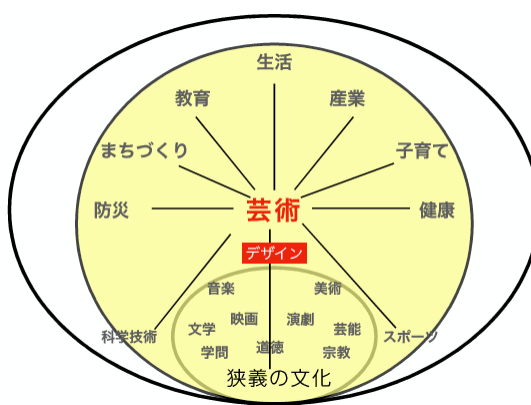
江戸川区役所にて齊藤区長に、藤崎圭一郎教授、伊藤達矢特任教授（現・教授）らが今後の本プロジェクトの方向性をプレゼンテーションし、その後懇談を行った。藝大側は、連携方法の提案をしたほか、『ともにアート』のビジョンとアートコモンズの構想を説明した。

広義の文化と狭義の文化



広義の文化を包括する

『ともにアート』



(東京藝術大学参席者)

藤崎圭一郎教授

佐々木里史テクニカルインストラクター

丸山素直テクニカルインストラクター

伊藤達矢特任教授

神永彰社会連携課長

福居季子社会連携課社会連携係長

(2) 日比野学長によるご用聞き



撮影：内藤美友

8月に区役所全庁内にご用聞きの希望部署を募集したところ、18の部署から様々な事業課題や困りごとが提示された。その中から日比野学長と相談の上、キックオフシンポジウムにおける公開ご用聞きに先立ち、9月21日に「障害理解の啓発にアートを活用できないか」というテーマで障害者福祉課の職員の方々を対象にご用聞きを実施した。対話の中では、江戸川区で実施されている「えどがわBOXART展」の意義を確認したり、また、職員から語られた「健常者の目線を変えていく」ことの難しさに対して、日比野学長より、自分に持っていない価値と出会える場として福祉施設の価値を転換できることが提起された。また、藝大での取り組みを事例として紹介しながら、アーティストと協働して福祉施設の場を開き、人との交流をつないでいくことで、アーティストが健常者との仲介役としても機能し、障がい者に対する健常者の眼差しを変えていくことができる可能性が提案・議論された。



撮影：内藤美友

表 日比野学長によるご用聞き 意見調書一覧

No	部署名	事業内容	事業課題や困りごと
1	経営企画部 企画課 企画係	70万区民のご用聞き	現在区では、日常業務の中で区民の声を聴くほか、広報誌やHP、SNSでのアンケート（Web・郵送）、イベント等参加者への声かけアンケート、無作為抽出で参加者を募るワークショップ、全世帯調査（郵送・訪問）、政策提案イベント、区民世論調査など様々な方法で区民の声を聴いている。しかし今後さらに、自ら声をあげる（ことのできる）人以外の「自分からは声をあげない人／あげられない人」の声を聴くための方法を模索したい。
2	SDGs推進部 ともに生きるまち推進課 SDGs推進センター	区民一人ひとりがSDGsの行動を習慣化できるよう行動変容を促すため、年度ごとに以下の目標を掲げ、普及啓発に取り組む	区では、区民の方へSDGsの行動を促すため「SDGs えどがわ10の行動」を作成し、様々な施策を行ってきました。その結果、令和4年度の世論調査では92%の方が10の行動のうちいずれかに取り組んでいるという結果でした。しかしながら、SDGsは全区民にとっての課題であるため、より一層取り組みを強化する必要があると感じています。ぜひ、アートの力を借りてこれまで以上に10の行動をPRし、区民の行動変容に繋がりたいと思います。課題解決に役立つご意見をいただければ幸いです。
3	SDGs推進部 ともに生きるまち推進課 共生社会推進係	・ともに生きるまちを目指す条例の制定 ・多文化共生に関する取り組み ・多文化共生のまち推進条例(案)への意見募集	江戸川区は都内で2番目に外国人が多く住んでいる区であり、在住外国人が日本人と同様に行政サービスを受けることができるよう、様々な施策を行ってきました。一方で、増え続ける外国人との共生に戸惑う区民もいます。4万人の外国人区民と、65万人の日本人区民が共生するための仕掛けづくりについて、ご意見を頂けたらと思います。
4	SDGs推進部 広報課 区政案内係	ウェブサイト及びSNSによる情報の発信	【区ウェブサイト】現在、課題を踏まえてデザインのリニューアルや内部向けの機能の充実を図っている。 【SNS】現在、集計で来ている情報を基に分析しつつターゲットに届く発信の方法を探っている状況。また、今後の分析などのために、より多くのデータを取れるように改修している。→どのような情報が必要なのかの見極めとその収集方法。ターゲット（人物）とその届ける内容の工夫。発信のタイミングの工夫。刺さる投稿にするための文章力や添付画像の工夫。情報の見せ方の工夫。
5	危機管理部 防災危機管理課 計画係	江東5区において、大規模水害時は浸水の恐れがない、より安全な区外へ事前に避難していただく、『広域避難』を推奨	令和3年の区民世論調査において、「大規模水害時、あなたは江戸川区外の浸水しない地域へ広域避難できますか。」という問いに対して、38.3%が広域避難ができると回答しています。区民の広域避難ができる割合を増加させるためには、どうしたらよいか伺いたいです。

6	危機管理部 地域防災課 防犯防災係	安全安心まちづくり事業 (防犯)	本区は、昨年から自転車の盗難被害件数が急増しており、本年においては都内ワースト1となっている。現在、広報紙やメールサービス等の各種広報媒体による啓発や地域を巻き込んだ啓発イベント、警察と連携した啓発活動を行っているが、既存の啓発方法にとらわれない、新たな視点・方法による啓発・対策についてご意見をいただきたい。
7	都市開発部 都市計画課 庶務係	①景観まちづくり ②駅周辺のまちづくり (再開発事業)	区内には12駅あるが、いずれの駅で降りた時も「水とみどりの江戸川区」など区の特徴を感じてもらえる魅力ある駅前の顔づくりができていない。
8	環境部 環境課 相談係	①路上喫煙者及び歩行喫煙者に対し、喫煙マナーの啓発活動を実施 ②「受動喫煙防止重点区域」を指定し、パトロールの実施とともに屋外喫煙所を設置し運営	歩きタバコ・ポイ捨て、受動喫煙(迷惑喫煙)の苦情が区に多く寄せられている。
9	環境部 清掃課 庶務係	廃棄物の分別に関する周知	「資源」のなかにある「容器包装プラスチック」が正しく分別されず、「燃やすごみ」や「燃やさないごみ」と一緒に「ごみ」として出されてしまう。外国人の方や、子ども、高齢者がわかりやすい容器包装プラの分別につなげて、資源として再利用したり、プラスチックの焼却を減らしてCO2の排出削減にもつなげたい。将来、容器包装プラに加えて、プラスチック製品も資源として分別してもらいたいことも検討している。
10	生活振興部 東部事務所 地域サービス係	若い世代の地域活動参加を広げるための取り組み・環境づくり	町会・自治会加入率低下、若い世代の地域活動参加意識の低下を背景に、活動の担い手不足・高齢化などによる地域活動の継続が懸念される。 ・コロナ禍の終息が見えてきて、各地で盆踊りや地域まつり、運動会などが復活している。しかし、準備や運営にあたる町会の役員の高齢化や担い手不足などにより、開催の見送りや規模の縮小などがあり、このことは地域の繋がり希薄化が進み、災害時の共助など多様化する地域課題の今後の取り組みへの影響が懸念されている。 ・上記から若い世代の参加が不可欠と考えるが、アートが行政課題の解決に役立つ可能性によるアイデアがあればご教示いただきたい。
11	産業経済部 産業経済部 商業係	区内商店街の空き店舗対策事業	・区内商店街内に空き店舗が増えている。 ・さらには、空き店舗(テナントを募集)のみならず、住宅、駐車場になるなど、“歯抜け”状態が増え、商店の集積が薄らいできている。

12	福祉部 介護保険課 事業者調整係	介護人材確保事業：介護人材不足への対策として本区では「確保」「育成」「定着」「事業者支援」「若年層への周知」等、多角度から複数の取組みを展開	厚生労働省が令和3年に公表した介護職員必要数の推計は、高齢化がピークを迎える2040年度に約280万人に達し、2019年度の介護職員数約211万人と単純比較すると69万人もの人手が足りないとされ、介護人材の確保が喫緊の課題である。また、介護業界に対する世間一般のイメージは「体力的にきつい仕事」「離職率が高い」等のネガティブイメージが先行する現状があり、これを打破もしくはポジティブイメージに転換したい。特に若年層世代（中高生等）に向けて発信していくには、どのような機会にあるいは手法により行っていくべきか課題として感じている。
13	福祉部 介護保険課 事業者調整係	認知症普及啓発事業：「認知症になっても安心して暮らせるまち、活躍できるまち」の実現に向け、認知症について正しい理解や望ましい接し方等の普及啓発活動	本年6月「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」が成立し、認知症の人を含め様々な人格や個性を尊重し共生する社会の実現へ推進しています。認知症が比較的身近にある高齢層の反応は一定の手ごたえを感じていますが、一方で若年層をはじめとした認知症に対して無関心な層への働きかけに苦慮しています。人の心を「無関心」から「関心」に切り替えるには、そのものを身近に感じる機会が必要と考えています。例えば、集う目的は「その楽しみ」を享受するためのみであるけれど、結果的に自分と違う多様な存在が自然にすぐ傍にいて相互理解がすすむような装置としてアートは活用できるのでしょうか。
14	福祉部 障害者福祉課 権利擁護係		障害理解の啓発をアートで活用できないか聞いてみたい。
15	福祉部 生活援護第一課 ひきこもり施策係	・ひきこもり個別相談支援 ・区民を対象とした周知啓発 ・関係機関との連絡調整や状況共有、関係部署との連携	区では支援が必要な当事者やその家族等に対しての情報提供や相談支援、居場所などの事業を行っているが、当事者や家族等が自分らしく暮らせるためには、これらの支援と並行して全ての区民がひきこもりの状態についての理解を深めることが欠かせない。ひきこもりの状態は、本人の甘えや怠けではなく、誰もが病気や介護、学校・職場等で不和等となりうる状態で、一時的にひきこもりの状態になることは選択の一つであることを広く社会に理解してもらうための取組みを進めることが必要と考えている。
16	健康部 健康推進課 健診係	がん検診受診勧奨事業	【課題】受診率が低いこと 受診率の低い働き世代(20歳代から64歳まで)や健康無関心層に対するアートを活用したアプローチについてアドバイスをいただきたい。
17	土木部 施設管理課 道路監察係	駅前広場(道路)の適正利用	日中から飲酒、喫煙及び地面に座込む人が見受けられる。また、飲酒を行っているだけでは、指導する根拠もない。
18	土木部 施設管理課 交通安全推進係	交通安全対策に関すること	令和4年の交通事故発生件数は1,395件。その内、自転車が関与している交通事故が731件あり5割強を占めている。自転車は主要な交通手段として幅広い世代に利用されているが、自転車利用者の信号無視や一時不停止など、ルールやマナーに課題がみられる状況となっている。自転車事故を減らすため更なる安全意識の向上を図る必要がある。

(3) キックオフシンポジウム

本プロジェクトの始動を記念し、2023年11月19日にタワーホール船堀にて実施した（入場無料、事前申し込み制）。定員250名に対し当日の来場者数は約200名であった。

シンポジウムは2部構成で行った。第1部は、江戸川区 斉藤猛区長と東京藝術大学 日比野克彦学長による『ともにアート』に関するトークセッション。第2部は、東京藝術大学日比野学長によるワークショップ（公開・ご用聞き）と題し、展開した。内容の詳細は、「2. キックオフシンポジウム 実施報告」を参照されたい。



撮影：大城喜彰

表 キックオフシンポジウム 当日の進行スケジュール

13:00	受付 開始
13:30～	シンポジウム 開始
13:30	〈開会の挨拶〉 〈藤崎教授によるオープニングトーク〉 江戸川区の魅力を生成 AI（Chat GPT）に訊いてみる
13:45	〈第1部〉 江戸川区 斉藤区長と東京藝術大学 日比野学長による 『ともにアート』に関するトークセッション
14:45	〈第2部〉 東京藝術大学日比野学長によるワークショップ （公開・ご用聞き）
15:00	〈閉会の挨拶〉

(4) 文化団体へのリサーチ（アンケート調査及びヒアリング調査）

本年度は、江戸川区内で活動する文化団体が抱える課題や団体活動の持続的運営に向けて必要なこと、区が担うべき支援を明確にすることに主眼を置き、リサーチを行なった。具体的には、文化団体の代表者へのアンケート調査、文化団体に所属する会員へのアンケート調査、文化団体の代表者7名へのヒアリング調査を実施した。

文化団体の代表者を対象としたアンケート調査は2023年11月～12月にかけて実施し、9団体（加盟団体を含めると20団体）より回答を得た。文化団体に所属する会員を対象としたアンケート調査は12月～2024年1月にかけて実施し、40名（12団体）より回答を得た。また、ヒアリング調査は、アンケート調査を実施した江戸川区内で活動する文化団体の代表者7名を対象に行った。リサーチの結果と考察については「5.文化団体へのリサーチ 結果と考察／次年度へ向けた提言」を参照されたい。



(5) 多世代交流ワークショップ

2024年2月10日には、共育プラザ一之江となごみの家一之江の協力のもと、多世代交流ワークショップを実施した。「藝大生と『金魚トンネルを作ろう!』」と題した本ワークショップでは、参加者各々が配られたカラーシールを金魚の形に自由に切り、透明なフィルムに貼っていくことで、透明な「金魚トンネル」をつくる、というものである。関係者を含め、100人を超える参加があり、制作時間3時間弱にもかかわらず、10mの金魚トンネルが見事に完成した。完成した作品は、共育プラザ一之江、なごみの家一之江のほか、文化施設でも展示された。

内容の詳細は、「3. 多世代交流ワークショップ 実施報告」を参照されたい。



撮影：石川真悠

(6) 旧第二松江小学校の改装

令和5年3月末で廃校になった旧江戸川区立第二松江小学校の一部を、えどがわアートコモンズのプレ拠点として改装し、活用していくことが決定し、本年度よりプランづくりをスタートした。改装に着手するのは、3階部分における2部屋であり、1部屋をギャラリー等での活用を視野に入れた多目的スペースに、もう1部屋は子育て世代が集う場所及び東京藝術大学のスタッフも使用するワークスペースとして改修する。本拠点の稼働は、令和7年1月以降を予定している。

2. キックオフシンポジウム 実施報告

2023年11月19日にタワーホール船堀にて開催されたキックオフシンポジウムは、「『ともにアート』が育む豊かな多様性のあるまち」をテーマに、江戸川区 斉藤区長と東京藝術大学 日比野学長による『ともにアート』に関するトークセッション（第1部）、日比野学長によるワークショップ：公開・ご用聞き（第2部）の内容で実施した。定員250名に対し、当日の来場者数は約200名であった（入場無料、事前申し込み制）。

キックオフシンポジウム『江戸川区 x 東京藝大「ともにアート」プロジェクト』

「ともにアート」

が育む豊かな多様性のあるまち

斉藤猛(江戸川区長) × 日比野克彦(東京藝術大学長) × 藤崎圭一郎(東京藝術大学教授)

+ ART 「ともに、生きる」を掲げ、誰一人も取り残さない2100年の共生社会を目指す江戸川区。アートのもつ「多様性を育む力」を社会に生かすことを試みる東京藝術大学。アートで様々な社会問題を解決することを目指し、「ともにアート」プロジェクトを始動します。江戸川区 x 東京藝大で何が始まるのか。

日時 11月19日(日) 13:30-15:00 (受付13:00)

場所 タワーホール船堀 2階 イベントホール「瑞雲・平安」定員 250人

トーク 斉藤区長 x 日比野学長 (モデレーター: 藤崎圭一郎)
江戸川区と藝大で何をやるのか? 江戸川区は藝大に何を期待するのか?

ワークショップ 公開・ご用聞き / 江戸川区が抱える課題を芸術は解決できるのか?
藝大学長とともに考えよう。

出演 斉藤猛(江戸川区長)、日比野克彦(東京藝術大学長)
藤崎圭一郎(東京藝術大学教授)

申込方法 11月2日(水)～11月17日(木)まで
入場無料 / 事前申し込みが必要です
文化課文化振興係へ電話または
区ホームページ(二次元コード)から申込

【主催】江戸川区・東京藝術大学 【お問い合わせ】江戸川区文化芸術部文化課文化振興係 電話：03-5682-0300

キックオフシンポジウム ポスター (メインビジュアル)

2-1. 第1部：斉藤区長と日比野学長による

『ともにアート』に関するトークセッション

第1部では、江戸川区 斉藤区長と東京藝術大学 日比野学長が登壇し、本プロジェクトの題目である『ともにアート』に関しトークセッションを行った。モデレーターは東京藝術大学 藤崎圭一郎教授が務めた。ここでは、トークセッションで話された内容の話題ごとに整理して記載することとする。

江戸川区の魅力と「アートコモンズ」構想について

藤崎：江戸川区は、家族向けに、住みやすい環境をつくっているというのは、皆さん非常に実感としてよくわかると思います。歩いていると、子育て世代のお母さんがベビーカーを押して、公園とかで遊んでいる姿とかよく見ますよね。地域の人たちに寄り添う形でまちづくりがされているな、というのがとてもよくわかりますよね。

江戸川区、ぼくはすごく素敵だなと思うんですよ。街って、風景がすごく大事だと思うんです。この街は平べったいですが、ちゃんと風景がある。山に囲まれているところというのは、いろいろな開発をしても、山があれば風景は変わらない。平べったいところって、どこかを建て替えてしまうと、風景が変わってきてしまうんですけども、でも江戸川区は、川べりとか親水公園があって、風景を大事にしている区だになっていうのを、僕は歩き回っていて思いました。

これから、藝大が何をしていきたいのかというと、文化・芸術を、もう少し、この区の中で根付かせていきたい、と考えています。それには、僕らは「アートコモンズ」って呼んでいるんですけども、「コモンズ」とは「共有財」という意味合いです。江戸川区はスローガンに「ともに」とありますけれども、「みなでともに分かち合う場所、財産」。それが「コモンズ」です。みんながそこでアート・芸術を楽しみ、アートを媒介にしながら集う。そういう居場所づくりみたいなものができたらいいな、というふうに考えています。ただ鑑賞するだけの芸術ではなく、皆さんが参加ができる芸術。そういう場所をつくる。それを「アートコモンズ」というふうに我々は考えています。江戸川区には、この間、「魔法の文学館」ができましたけれども、区立美術館はありませんよね。他の区にあるような、有名な作家の作品を買ってそれを収蔵して、というような形の区立美術館は、もういっぱいあります。そういう意味では、新しい形のアートの活動の場みたいなものを江戸川区で広げていけたらいいんじゃないか、というふうに思います。先ほど実験した Chat GPT に尋ねたとき、「江戸川区には、他の区にはない、文化芸術活動

の拠点になるようなアートコモンズがあるんだ」とこたえてもらえるような、そういうようなことを、長く江戸川区とお付き合いさせていただきながら実現していきたいと考えております。

藝大に期待すること／「芸術」とは何か

藤崎：はじめに、斉藤区長がどのようなことを藝大にご期待しているのか、具体的にお話しいただけますでしょうか。

斉藤：私自身は、芸術とは一部の方のものじゃないか、という思いがあります。もっと言えば、上流社会のもので限られた人がやるものだと。大変失礼だったらお許してください。そんなようなイメージが実はございました。ただ、数年前に初めて総合文化センターで「えどがわ BOXART 展」のために来られた日比野学長とお会いした時のことですが、私は入り口で待っていたんですけども、日比野学長は裏のほうから、落ちている葉っぱとかゴミをもって入ってこられたんですよ。「こういう落ちているもの、身近なものが芸術につながるんだ」ということをお話いただいて、私自身びっくりいたしました。一部の、上流社会のものである芸術が、道に落ちているものから表現することができるんだと。そうであるならば、江戸川区の70万区民人一人一人が芸術の素晴らしさ、楽しさを知る地域になればいいなというふうに思いました。

日比野：日比野です。よろしく願いいたします。はい、裏口から（笑）。僕にとっては、親水公園があったりして、文化センターは裏口が表のような気がしていました。いま斉藤区長から、藝大との関わりのきっかけがこの「えどがわ BOXART 展」での出会いだったっていうのを改めてお伺いし、これから江戸川区と藝大が取り組んでやっていく、今日がスタートですけども、その方向性がすでに一つしっかりとあるということ、改めて確認できたような気がいたしますね。

今日もここに来る前に、文化センターに立ち寄って、今回3回目の「えどがわ BOXART 展」の下見をしに見てきたんですけども、とってもかわいらしい作品が多くありました。年齢は2・3歳から70代までと幅広い。小学校、幼稚園、絵画教室、障害者施設など、様々な団体にエントリーしてくれているところもありました。「ボックスアート」は、誰でも親しむことができるのが魅力だと思っています。作品を描く、絵を描くとかっていうと、ちょっと、緊張する時があるんですよ。「僕ちょっと絵が苦手なんです」って言いがちですけども、「ボックスアート」は箱に何か好きなものを詰め込めば、それで最低限形にはなるのでね。もっと気楽に、ハードルを低く、誰でも参

加できるという魅力がある。そして何よりも、みんなに見てもらおう晴れの舞台があることによってモチベーションも上がりますよね。小学校とか中学校の図工・美術の先生の大会に呼ばれて話す時もありますが、褒めることって、やっぱり大事なんです。算数だと、 $1 + 1$ は2っていう正解がありますが、アートって答えがない。なので、褒めてもらわないと良いか悪いかよくわからない。絵の場合は100人いたら100通りの良さがあるので、作品を見た時に「いや、俺はこの絵がいいな」「私はこの絵がちょっと苦手だな」というのは当然起こることで。けれども、みんなが描いたものを廊下に掲示するとか、晴れの舞台があることで、みんなで一人一人の違いを見て、自分らしさをそこで見つけていくことができますね。ハイレベルな教育の積み重ねで高尚なものを求めるのだけがアートの魅力ではなく、多様性を認め合うことができるというのも、もうひとつのアートの魅力です。今、東京藝術大学は、これまでの、いわゆる世界のトップレベルのアーティストを輩出していくということも同時に進めながら、もう一つの、多様性を認め合えるというアートの魅力も大学として発信していこう、という取り組みを始めています。

日常の中にアートがある

日比野：美術館に行けばアートが待っていてくれる、音楽ホールに行けば音楽に接することができる、というように思いがちですよね。でも、例えば、ただ一日歩いてみる。僕は、この間「なんか虹が出そうだな」と思って歩いたら、本当に虹が出たんですよ。キョロキョロしていたら、うわっ！と。「あっ虹、出てる」って、突然見つけるのが虹じゃないですか（笑）。どんな美術館に行ってどんな素敵な絵を見るよりも、映画館に行ってどんな名監督の撮った映画を観るよりも、ちょっと心が動かされましたね。こんなことのように、色であったり形であったり現象であったり、日常の中のちょっとしたことの中で心がふわっと動く時ってありますよね。例えば、藝大で勉強している人たちは何をやっているかというのと、感動したものを伝えたいと思って、自分の得意な彫刻にしたり絵を描いたりするわけです。作家にも日常があるわけで、日常の中で見つけたものを作品にして他者に伝えたいと。作品に関して、極端な話を言うと、ゴッホのひまわりの絵を見て「なんかすごいな」って思うと思うんですけども、考えてみれば、あれはキャンパスに絵の具がくっついているだけです。物理的に絵の具がくっついているだけのものを見て、感動できるっていうのは、絵がすごいのではなくて、そういう感動できる心をもっている自分がすごいわけですよ。じゃあ、絵かき

は何をやっているかという、その鑑賞者がもっている感動のスイッチを入れる役割をしている。絵がすごいわけではなくて、絵を見て感動するあなたがすごい、というところがアートの一番大事なところだと僕は思います。そうすると、歩いていて花が咲いているとか、音が聞こえてきてなんかあの音いいとか。風が吹いてきて気持ちいいとか、料理をつくるのに見事な包丁さばきだとか。そういう、何かちょっと心が動くということ全てがアートだ、という考え方であっても間違いではないですよ。なので、美術館に行って名画名品を見るだけがアートの体験ではなく、日常の中にもアートがあるんだ、ということをしつかりと東京藝術大学として発信していきたいなと考えています。

齊藤：一人一人の生活に根付いた形で、そこにアートがある。例えば、気持ちが落ち込んでいても一輪の花が咲いてるだけで明るい気持ちになるのもアートなんだと。江戸川区には区立の美術館も博物館もなかったということで、果たしてこれで良かったのかと、いろいろ考えていたんですけども、今のお話を聞けば、まち全体が美術館・博物館という形で捉えることもできるんじゃないか、というふうに思いました。どうしても目に見えるものを追いかちだったんですけど、今ハートの部分を教えていただいた、そんな気がしました。

藤崎：では、日比野学長、実際に日常の中にアートを浸透させていくために、その地域の住民の方が心をより豊かにしていくためにはどうしたらよいんでしょうね？

日比野：人間って忘れっぽくってすぐ慣れる。熱いお湯に入っているけど、だんだん慣れるじゃないですか。人間って、順応性があるからこそ生き残ることができていると思うんですけども、驚きがないと単調な生活になってしまっ、張り合いがなくなってしまうですね。でも、些細なことで、自分の中の心の機微の変化を見つけることができると、また、自分に対してのスイッチを見つけると、かなり人生面白いんじゃないかと思うんです。

また、例えば、聴覚的に不自由な方がいた場合、僕なんかは音が聴こえないという世界はどんな世界なんだろうかと興味を抱くわけです。耳が聴こえないと不自由だからなんか大変だなって思うのではなく、聾者の世界ってどうなっているんだろうかと関心をもつ。それがアートであり、アートの面白いところだと思います。視覚的に不自由な方がいたら、目の見えない世界って一体どんな世界が広がっているんだろう、と興味を示す。あなたの杖になって、私がフォローしますよというものではなく、逆に、そのハンディをアドバンテージとして、個性として捉え興味をもつ。つまりは、価値の変換ですね。価値の変換ができるのがアートなんです。藤崎先生の問いの「どう

やってアートに興味をもつ当事者にしていったらいいのか」ということに関して、些細なことでも自分との違いに興味を示していくこと、ではないでしょうか。日常のいろいろなことに対して関心をもっていくと、それがアートという価値に変換できるスイッチになっていくのかな、と。



撮影：大城喜彰

SDGs における芸術の役割

日比野：SDGs は、持続可能な地球を築いていくために、人権や教育、環境などを様々なテーマに設定された達成すべき 17 のゴールですよね。何でこういう課題が出てきてしまったのかというと、これは人間の日常の行動の積み重ねによって生まれてきたわけです。ですから、解決には人間の行動の変容が求められる。でも、一気に変えることはできないので、行動変容を促すきっかけとして、2030 年までに 17 の目標が示されています。SDGs の 17 のゴール（目標）の中には、芸術や文化という言葉は出てきません。では、芸術・文化は関わらなくていいのか、というと、それはちょっと違うなと思っています。芸術・文化はどこにあるのかというと、この 17 の色が混ざっている真ん中のところ。ここにこそ、芸術の役割があるんじゃないか。課題解決を継続的に、持続的にやっていくには、自分の気持ちとして、環境を守りたいんだとか、ジェンダーに対して意識を変えたいんだとか、そういう自分の気持ちが動かないと継続はできない。気持ちを動かす、心を動かすっていうのは



アートの得意なところですよ。全ての人間に対して心を動かし行動変容を促すこと、芸術はそこに貢献していこうという大きな目標があります。そこで、藝大に「芸術未来研究場」というものを2023年4月につくりました。「研究『所』」ではなくて「研究『場』」ですね。なぜ「場」かということ、皆が集まってこられる場をつくりたい、という思いがあるからです。「芸術未来研究場」は、大学の教育研究機関と官庁や地方自治体とをつないでいくという役割を担っており、研究場の中にはいま5つの領域（芸術教育、リベラルアーツ／ケア、コミュニケーション／アートDX／クリエイティブアーカイブ／キュレーション）を設定し、スタートしました。

齊藤：今の学長のお話を聞きしますと、芸術とは人の営みそのものであると感じました。いま区政の中でいろいろな課題があります。少子高齢化、人口減少、災害対策、その他に気候変動もそうです。様々なことがたくさんあるんですけども、そういったものが、もしかしたら全て、芸術につながるんじゃないか。先ほど学長から、芸術は気持ちを動かす、感動する、というようなフレーズを話されていましたが、やはり、まちづくりで大事なものは皆さん一人一人が自分事にするということだというふうに思っています。

文化×スポーツ×芸術

齊藤：日比野学長から教えていただいたことがあります。私は、江戸川区で、もっと文化とスポーツの両方を発展させていきたいという思いがあります。日比野学長はサッカーがお好きでいらっしゃるので、どうしたらいいんですかねって相談をしたら、文化とスポーツの融合は、難しいことじゃないんだと。障害をもっているお子さんたちに、まずはサッカーのボールをつくってもらおう。ぐるぐる巻きのテープでもいいんだと。次にサッカーのゴールをつくってもらって、そして最後はユニフォームをつくる。それがもう芸術で、そうやってみんなでサッカーを楽しめばいいというのです。それにとっても感銘を受けたんです。

日比野：スポーツもアートも好きなので、僕の中では、なぜ二つをわけるのかなって思いがあります。スポーツとは表で元気な子が思いっきり体を動かすことであり、アートとはちょっと内向的な子が一人家の中でお絵かきするものみたいな。そういうステレオタイプの考え方自体、もうほんとやめてくれって（笑）。スポーツだって内向的な子もいるし、アートだって外交的な子も当然いるわけで、一人一人、自分の中のグラデーションというかバランス的なものがあるのですね。僕は両方好きなので、先ほど区長が言われた、午前中は図工でユニフォームとボールとゴールをつくる、午後はそれを使

って体育の時間でサッカーをやるという、こんな幸せな1日ないなって言って、それをみんなでやろうって始めたのが「HIBINO CUP」というワークショップです。そこには、障害のある子ども、サッカー好きな健常者もみんな混ざって一緒になってやっています。

芸術はいかに社会に貢献できるのか

藤崎：区長は、以前は福祉関係のお仕事をずっとなさっていたというふうに聞いています。ケアのシーンにおけるアートの役割について、斉藤区長はどのようにお考えになっているのでしょうか。

斉藤：例えば、私の経験談になるんですけども、認知症で無表情で、何をやっても、話しかけても、表情があんまり浮かばない。そんな方が、自分が若い時の歌謡曲が流れて、マイクを握った瞬間に楽しそうに歌を歌って笑顔になる。音楽って、人を変えることができるんだと思いました。また、障害のある方が素晴らしい絵を描かれる、しかも一瞬見ただけでと。そういうのを見ると、やはり、芸術・アートというのは、自己表現する大きなツールであると思いました。冒頭、日比野学長もおっしゃられましたが、褒められると誰もが嬉しいですし、それは自己肯定感の高まりにもつながることだとするならば、芸術の意義はこんなにも幅広いのかと感じているところです。

藤崎：日比野学長も、ケア・福祉とアートをつなげていくという活動をずっとなさっていると思います。具体的にどんなことをされているか、ご説明いただけますか。

日比野：藝大の例を出すと、「DOOR」という授業があります。「Diversity on the Arts Project」という、福祉×芸術をテーマにした社会人も履修できるプログラムで、今年で丸6年になります。いま受講者は100人ぐらいですかね。福祉の専門の人たちに授業をしてもらったり、また、当事者である障害をもつ人たち、障害をもつ方のご家族、いろいろな支援活動をしている方々、障害をもつ方々のアクセシビリティ改善をテーマとして開発している企業の人たちにも来ていただいたりとか。心理、哲学など、様々な角度から芸術がウェルビーイング(=より良い生き方)のために何ができるのかを考え、芸術というものを、芸術のためだけの芸術だけではなくて、ウェルビーイングな、より質の高い生活を送るための一つの手段として、そして、発想の起点として取り入れていこう、ということで「DOOR」の授業を展開しています。

藤崎：いま藝大が取り組んでいる「文化的処方」についてもご説明をいただけますか。

日比野：「芸術は人生のプラスになります」「心を豊かにします」って言われたとき、何となくわかるんだけど、それをちゃんと証明してもらえますか？って言われると、なかなか難しいんですよね。ちゃんと証明できれば、そこに時間も予算も人も投資して、どんどん力を入れていきたいと思いますってことになるわけですが、なんとなくわかる、ではなかなか進まない。行政や企業と組んでやっていく時には「前年度比何パーセントアップ」という話になりますので。「アートが世の中のためになる」ということを数値化すること、ということ始めていかななくてはいけない。「文化的処方」という言葉は、イングランドにおける「社会的処方」という先行事例に着想を得たものです。社会と接することによって、より健康になると。先ほど区長が言われた、認知症の方が歌を歌って元気になるというお話、これは社会的処方ですね。藝大はもう一歩踏み込んで「文化的処方」という言葉をつくり、その「文化的処方」の効果をしっかり明らかにしていこうと取り組み始めました。長い期間をかけて、5年、10年、20年かかると思うんですけども、文化的処方の定量化をしっかりとやっていこうと。これは藝大としても画期的なことです。藝大が文化的処方に対して取り組み始めたということで、様々な企業からも声をかけていただき、いま60あまりの企業・自治体と組んで研究を一緒にやろうとしています。

藤崎：「文化的処方」とは、処方箋として薬が書かれているのではなく、文化活動に参加していくことによって、患者さんの健康や幸せの度合いが変わっていくという、指標づくりのことだと思いますけれども、区長、江戸川区として、ご協力いただけることはありますでしょうか？

齊藤：例えばですが、高齢になって、「自分は生きがいをもっています、何かやることができます」というような方と、そうじゃないという方とにアンケートをとりますと、介護を受けている、つまり要介護になる割合が違うんです。生きがいをもっているという方のほうが、要介護になっている割合が大変低い。役所の中でも、根拠は何かとか、数値で示してとか、そういうところはありますので、そういったところが数値化されて明確になると、より一層力を入れる、後押しできるようになると思います。

文化活動への参加にも色々あると思うんですが、一つ明快に言えば「外に出てほしい」というふうに思っているんですね。「外に出る」割合を大事にしたいと思っています。今日行くところがある、今日用事がある、ということ「きょういく（今日行く）、きょうよう（今日用）」と表現しますけれども、やっぱり外に出てって大切だと思うんです。先ほどの話にもあった、些細なことかもしれないですけど、いろんな感動に出会えるかもしれないし、またそこで人と会って、いろいろなコミュニケーション、人とのつな

がりも生まれるかもしれない。一言でいえば、いかに外に出てもらおうか。そこを大事にしたいなと思っています。

藤崎：それは、高齢者の方だけじゃなく、例えば、ひきこもり対策などにもつながっていくことですね。

斉藤：もちろん、若い方でもそうですし、全世代を通じて、できれば70万人区民、皆さんが外に出る。そういったところを目指していければなと思っています。

藤崎：「70万人区民全員が外に出る」、いいですね。

日比野：例えば、本を読んでいると、いま自分がどこにいるのか忘れちゃった、あっそうだ、喫茶店にいるんだって経験、みなさんもないでしょうか。割と自由に、どこにでも行ける能力を人間は持っているんですよ。そして、アートにはここじゃないどこかに誘ってくれる力がある。物理的に動かすこともあるし、物理的に動かなくても、人間は違う所に行く能力をもっているの、それを芸術作品が引っ張り出してくれると。それは文学でもいいかもしれないし、音楽を聴いてるだけでもいいのかもしれない。ここじゃないどこかに行くという、行き方の選択肢の多様性ですね。物理的に行くこともあれば、小説を読み続けていろんな所に行くこともあるでしょう。でも、小説をいっぱい読んでいると、実際自分もそこに行ってみたいなと思って、表に出るようになるかもしれない。きっと、本当に孤立・孤独というと、本も読みたくない、音楽も聴きたくない、かといって表にも出たくない、その辺を自分でコントロールができなくなってしまうことかもしれない。その時、その人たちを何とかして、ここじゃない、どこか違うところに誘う方法として、社会的な処方箋の接し方をいろいろつなげていく必要があるのではないのでしょうか。福祉的な人たちで「元気ですか」って、きちんとフォローするという制度もありますが、文化的処方箋を通して社会と接するつなげ方もあると思っています。そのためには文化的な処方箋をする人を育成していかなければいけない。「文化リンクワーカー」という呼び方をしていますが、「文化リンクワーカー」はまだ日本にはいません。お薬だと、ワクチン注射を打てば、たいていの人には効くわけですが、文化の場合、万人に効く処方箋はないんですね。100人いたら100通り、処方箋の仕方も人によって違う。文化的処方箋を受ける患者さん一人一人に対して、情報をもって距離感を考えて接していかなければいけない。そこはいま、芸術未来研究場の中で研究している段階です。

斉藤：私たちは、ひきこもり状態にある方を何とかできないかということで、24万人にアンケートをとったりしました。その中で、ひきこもりの方が9,000人いるという数字が出てきたんですけども、そこで、ひきこもりの方に

「文化活動を行っていらっしゃいますか」ということも聞いています。その結果、ひきこもりの期間が長くなればなるほど、文化活動をしていないということも見えてきました。そうすると発想を逆にしてみれば、文化活動をやっているならば、ひきこもり期間を短くできるのではないかと。いろいろな面で、文化活動との接続をこれからも区政の中で生かしていければと考えています。

2-2. 第2部：日比野学長による公開・ご用聞き

第2部は、「公開・ご用聞き」（注）と題し、江戸川区に所在する施設・団体の代表者より事前に質問を募集し、日比野学長が質問者とその場で対話をしながら、課題解決の手がかりと方向性をともに探る、というワークショップを行った。当日は、時間の都合上、2名の質問が取り上げられた。

（注）「ご用聞き」とは、日比野克彦が熊本市等で行ってきた活動の名称であり、まちの人や市役所の職員と顔を突き合わせ、ざっくばらんな対話をする中で、日比野が解決すべき問題や現場の悩みなどに答える、ある種のリサーチ活動をさす。

① なごみの家一之江 熊谷恵津子所長より

質問：

なごみの家一之江近くの商店街には空き家もあるが、皆が集い、多世代交流が育まれる活気のある商店街にするためにアートがどう生かせるのか。なごみの家がどう関われるか。

キーワードとなる「多世代交流」について、熊谷所長より「多世代の人たちが交わる場所が非常に少ない」という課題が話され、日比野学長からは、藝大の「TURN プロジェクト」（アーティストが福祉施設や社会的支援を必要とする人のコミュニティへ赴き、出会いと共働活動を重ねるプロジェクト）を引き合いに出しながら、アーティストとの協働による価値の発見と転換が提案された。

② 共育プラザ一之江 本炭智恵館長より

質問：

中高生の社会性の向上を目的とし、なごみの家と交流（世代間交流）を図っているが、持続性のある活発した交流につなげるためにアートがどう生かせるのか。

高齢者が利用するなごみの家との交流をコロナ禍において制限せざるを得なかった現状が本炭館長より話され、日比野学長からは「明後日朝顔プロジェクト」（朝顔を育てることを通して地域のコミュニティを育み、収穫された種を通して人や参加地域をつないでいくプロジェクト）の事例が紹介された。アーティストと協働し、アーティスト目線でのモノの見方・「形」のつくり方で交流の場をつくり出していくことが提案された。

※ この2つの質問が次章で報告する「多世代交流ワークショップ」企画のきっかけとなった。

3. 多世代交流ワークショップ 実施報告

多世代交流ワークショップは、2024年2月10日に共育プラザ一之江となごみの家一之江の協力のもと実施された。2023年11月19日に開催されたキックオフシンポジウム第2部において、「多世代交流」や「世代間交流」をテーマとした質問が取り上げられたことがきっかけとなり、本ワークショップが企画され、実現した。当日は、予定参加者数を大幅に超える100人（関係者を含め）の参加があった。

ワークショップ概要

テーマ：藝大生と「金魚トンネルを作ろう！」
日時：2024年2月10日（土）9時～12時
会場：一之江小学校 体育館
監修：藤崎圭一郎（東京藝術大学 美術学部 教授）
企画：丸山素直（東京藝術大学 美術学部 テクニカルインストラクター）
倉田明佳（東京藝術大学 美術学部 教育研究助手）
協力：共育プラザ一之江、なごみの家一之江、東京藝術大学学生



「藝大生と『金魚トンネルを作ろう!』」と題した今回のワークショップでは、参加者各々が配られたカッティングシート（カラーシール）を自由に金魚の形に切り、透明なシートに貼っていくことで、最終的に大きな「金魚トンネル」を完成させる、という内容で行われた。なお、「金魚トンネル」の「金魚」は、江戸川区で盛んであった金魚の養殖に、「トンネル」は企画者である丸山素直氏が江戸川区内をリサーチした際に目にしたビニールハウスにそれぞれ着想を得ている。

丸山氏は、「多世代が交流しながら一つの大きな作品をつくる」こと、そして「完成した作品に溶け込みながら鑑賞を楽しめること」にこだわりをもって、本ワークショップを企画したと語った。特に、「トンネルをつくる」という発想については、「完成した作品の中をトンネルのように潜ると、まるで異空間にいるようで楽しい」、「『ビニールハウス』を水族館のように見立て、その中を『金魚』が輝きながら、頭の上や横を泳いでいたら素敵ではないか」と、今回のワークショップを構想したと述べた。「金魚」をつくる過程については、事前に企画者側でセレクトした色の組み合わせのカッティングシートを使用すること、ハサミで切って制作すること、というシンプルな2つのルールを設定することによって、「自由に、バラバラに個々が制作をしても、全体に統一感のある大作ができる」ように仕掛けをしていたと丸山氏は語った。



創作の様子
撮影：石川真悠



完成した「金魚トンネル」



完成した「金魚トンネル」を鑑賞する参加者の様子

撮影：石川真悠

3時間弱の制作時間にもかかわらず、10m の金魚トンネルが完成した。ワークショップ実施後、完成した作品は共育プラザ一之江、なごみの家一之江のほか、文化施設でも展示された。



展示の様子（上段：なごみの家一之江／下段：共育プラザ一之江）

【参加者の声】

〈なごみの家一之江〉

- ・「とても楽しく過ごせました。時間の経つのも忘れるくらいでした。ありがとうございました」(70代・男性)
- ・「みんなでああでもない、こうでもないと言って作って貼ったら、魚も『井戸端会議』のようになっていた」(80代・女性)
- ・「みんなのアイデアに驚かされた」(70代・女性)
- ・「こうして老若男女が各自で作ったものが、トンネルの形になると一体感がありそうなるように最初からデザインされたかのようにするのがスゴイ」(80代・男性)
- ・「自分だけで作っているのとは違い、人の作品を見れるのが楽しかった」(60代・男性)

〈共育プラザ一之江〉

- ・「楽しかった！」(中学2年生・女子)
- ・「とても楽しかった。こういう企画はまたあったら良いですね」(70～80代・女性)
- ・「素晴らしい企画です。自施設の職員や利用者にももっと体験してほしい」(50代・男性／共育プラザ南篠崎館長)

〈一之江小学校すくすくスクール〉

- ・「子どもたちも思い思いに自由に作らせてもらうことができ、長い時間集中して作業する子もいて、普段とは違う意外な才能を発見できました」(スタッフ)

【考察】

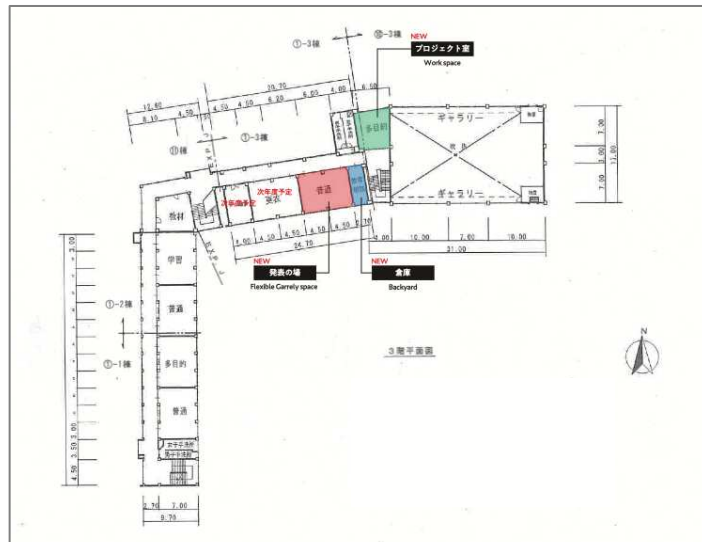
今回のワークショップは、「多世代交流」がキーワードであり、目的として掲げられた上で実施された。振り返って考えてみると、多世代交流は、創作過程の中で自然に生まれていたように感じる。ある高齢女性がカッティングシートのシールを剥がせないでいると「剥がしてあげる！」と小学校低学年くらいの女子児童が手助けをしていたり、作品を透明シートに貼りに来た子どもたちに「眼まであって、見事なお魚ね」と周りの大人が褒めていたり、小学校低学年くらいの女子児童が自身の創作した金魚をめぐるストーリーを隣にいた高齢男性に話しかけて談笑していたりと、仕掛けられたわけではなく、作品をつくったり、貼ったりする過程の中で、自然と交流が生まれていた。

また、多世代交流が自然発生的に生まれる中で、互いの作品から触発し合う環境が生まれていたことにも注目したい。完成した金魚トンネルには、金魚に限らず、様々な海の生物の姿があった。金魚等を創作し、自分でつくったものを透明シールに貼りに行くというプロセスは、自分の作品を他者に見せる＝発表する場であると同時に、他者の作品の面白さに触れ、自身の創作に活かせる場としても機能していた。「ここにこんな作品があるから、この横に自分はこんな作品をつくろう」、「金魚じゃなくてカニがOKなら、自分はウミヘビを、海藻を、人魚をつくろう」といったように、参加者個々が他者のつくった作品に触発されながら、創作意欲を刺激され、イメージを膨らませながら創作づくりに没頭することができたのではないだろうか。作品が「金魚」から逸脱し、海の生物に広がっていったことについて、企画者である丸山氏は「『金魚』から始まり、徐々に様々な生き物が出てきたことは想定内で、少しずつ出来上がっていく『金魚』のトンネルが水族館のように見えて、きっと想像力の幅が広がったのだろうと思う」とコメントした。また、スタッフとして参加した9名の藝大生が夢中になって創作している姿も、参加者たちの刺激になったに違いない。

4. 旧第二松江小学校 改装の概要と方向性

江戸川区と東京藝術大学が協働して『ともにアート』をするスペースづくりに取り組んでいく第一弾として、令和5年3月末で廃校になった旧江戸川区立第二松江小学校の一部をえどがわアート commons のプレ拠点として改装し、活用していくことが決定した。

改装に着手するのは、3階部分における2部屋である。1部屋をギャラリー等での活用を視野に多目的スペースとして改装し、もう1部屋は子育て世代が集う場所及び東京藝術大学のスタッフも使用するワークスペースとして改修する。本拠点の稼働は、令和7年1月以降を予定している。



改装部分の詳細



旧第二松江小学校の現況 (2023年12月)

5. 文化団体へのリサーチ 結果と考察／次年度へ向けた提言

文化芸術に係る文化団体の活動実態を把握し、団体活動の持続的な運営に向けて必要なことや区が担うべき支援を明確にすることを目的に、[1]文化団体代表者へのアンケート調査、[2]文化団体会員へのアンケート調査、[3]文化団体の代表者へのヒアリング調査を実施した。ここでは、調査ごとに集計結果をまとめ、最後に考察として、次年度以降へ向けた提言を示すこととする。

【要約】 リサーチ結果と提言

[1]文化団体代表者へのアンケート調査

団体代表者を対象としたアンケート調査では、現在の活動状況に加え、活動に対する行政からの支援、団体が抱えている課題、団体活動継続のための自主的な取り組み、区に求めたい支援について質問し、回答を整理・分析した。中でも、団体が抱えている課題は、①高齢化／若者の担い手不足、②活動の質の低下、③事務作業の負担、④参加者の減少／他活動との競合、⑤活動場所に関する問題、⑥費用面での負担、以上の6項目に整理され、それぞれが独立した課題として存在しているのではなく、互いに関連していることが示唆された。

[2]文化団体会員へのアンケート調査

団体の会員を対象としたアンケート調査では、所属したきっかけ、活動の中で感じる「面白さ」や「やりがい」、「困難さ」について質問し、回答を整理・分析した。「面白さ」や「やりがい」として記述された内容を活動継続年数で分析すると、新入団員・中堅・ベテランの活動歴によって、面白さを感じる内容に違いが見られた。活動を続ける中で感じる「困難さ」については、団員自身が抱える課題よりも団として抱えている課題に対し、より困難さを感じていることがわかった。

[3]文化団体の代表者へのヒアリング調査

7つの文化団体の代表者を対象に行ったヒアリング調査で語られた内容を整理すると、団体が抱える課題や今後の活動に対する展望には大きく4つの共通項が見られた。それは、①共通課題としての「高齢化／若者の担い手不足」、②子ども／若者世代をターゲットにした取り組みの模索、③活動しやすい環境づくり：施設の予約・確保の改善等、④演奏会・展示会等のイベント実施時に発生する事務作業等の負担である。

本リサーチの分析・考察から、取り組むべき課題として以下6点を提案する。

1. 若い世代を文化活動へ巻き込んでいく取り組みの推進
2. 文化活動に参加したい人がアクセスできるルートづくり
3. 開かれた活動への後押し
4. 発表場所や練習場所の増設、及び施設の予約方法等の改善
5. プロの領域に触れる機会の設定
6. 文化的なボランティア、文化リンクワーカーの人材育成

5-1. 文化団体代表者へのアンケート調査 概要と結果

(1) 調査の概要

・調査の目的：

文化団体の活動状況を把握し、団体活動の持続的な運営に向けて必要なことや、区が担うべき支援を明確にすること

・アンケート実施時期：

2023年11月～12月にかけて実施

・アンケート実施方法：

紙で配布／Googleフォームによるオンライン回答

・アンケート項目：

[団体の概要] 団体名、年齢層、活動場所、団体立ち上げの経緯、会員の条件、会費の有無、活動に対する行政からの支援や活動における地域との連携の状況、

[活動の内容] 日頃の活動内容、活動計画の組み立て

[運営での取り組みや課題] 抱えている課題や困っていること、活動継続のための自主的な取り組み、区に求めたい支援、東京藝術大学に求めたい協力

- ・回答を得た団体：
9 団体（加盟団体を含めると 20 団体）

表 回答団体一覧

1	江戸川区美術会
2	江戸川区俳句連盟
3	江戸川区川柳作家連盟
4	江戸川区書道連盟
5	江戸川区華道茶道協会
6	江戸川区短歌連盟
7	江戸川区囲碁連盟
8	江戸川区音楽協議会
9	江戸川吹奏楽団

（「江戸川区音楽協議会」等の加盟団体）

8-1	江戸川演奏家協会
8-2	江戸川ギター・マンドリンクラブ
8-3	江戸川区音楽祭合唱団
8-4	江戸川区 PTA コーラス (a)
8-5	江戸川区 PTA コーラス (b)
8-6	コール・フロインデ
8-7	音の会
8-8	江戸川ウインドオーケストラ (注 1)
8-9	リコリスウインドアンサンブル (注 1)
8-10	合唱隊「群星」 (注 2)
8-11	ミュージック フレンズ

注 1：江戸川区吹奏楽連盟に所属

注 2：江戸川区合唱連盟に所属

(2) アンケート集計結果

○会員数と年齢層

～30代	30～40代	40～50代	50～60代	60～70代	70代～
------	--------	--------	--------	--------	------

	団体名	会員数	年齢層			
			もっとも多い年代	次に多い年代		
1	江戸川区美術会	600	70代～	～30代	50～60代	60～70代
2	江戸川区俳句連盟	200	70代～	60～70代		
3	江戸川区川柳作家連盟	70	80代～	70代～		
4	江戸川区書道連盟	368	60～70代	50～60代		
5	江戸川区華道茶道協会	63	60～70代	50～60代		
6	江戸川区短歌連盟	110	70代～	60～70代		
7	江戸川区囲碁連盟	170	70代～	～10代	60～70代	10～20代
8	江戸川区音楽協議会	91+加盟団体	60～70代	50～60代	70代～	
9	江戸川吹奏楽団	61	30～40代	～30代		

〈江戸川区音楽協議会の加盟団体〉		会員数	年齢層	
			もっとも多い年代	次に多い年代
8-1	江戸川演奏家協会	79	30～40代	～30代
8-2	江戸川ギター・マンドリンクラブ	30	60～70代	50～60代
8-3	江戸川区音楽祭合唱団	35	70代～	60～70代
8-4	江戸川区PTAコーラス (a)	200	50～60代	60～70代
8-5	江戸川区PTAコーラス (b)	45	50～60代	60～70代
8-6	コール・フロインデ	12	60～70代	50～60代
8-7	音の会	10	70代～	60～70代
8-8	江戸川ウインドオーケストラ	50	30～40代	40～50代
8-9	リコリスウインドアンサンブル	50	30～40代	40～50代
8-10	合唱隊「群星」	26	～30代	30～40代
8-11	ミュージック フレンズ	16	50～60代	～30代

団体に所属する会員の年齢層について、「もっとも多い年代」と「次に多い年代」をきいたところ、江戸川吹奏楽団 (no.9) を除き、8 団体 (no.1～8) では「70代～」や「60～70代」が目立つ結果となった。なお、囲碁連盟 (no.7) は5つの加盟団体があり、うち2団体が子どもを対象としたものであるため、「～10代」「10～20代」という回答があった。

○会員になる条件の有無

		会員になる条件
1	江戸川区美術会	無
2	江戸川区俳句連盟	無
3	江戸川区川柳作家連盟	無
4	江戸川区書道連盟	有
5	江戸川区華道茶道協会	有
6	江戸川区短歌連盟	無
7	江戸川区囲碁連盟	無
8	江戸川区音楽協議会	無
9	江戸川吹奏楽団	有

〈江戸川区音楽協議会の加盟団体〉		会員になる条件
8-1	江戸川演奏家協会	有
8-2	江戸川ギター・マンドリンクラブ	無
8-3	江戸川区音楽祭合唱団	有
8-4	江戸川区PTAコーラス (a)	有
8-5	江戸川区PTAコーラス (b)	有
8-6	コール・フロインデ	有
8-7	音の会	無
8-8	江戸川ウインドオーケストラ	有
8-9	リコリスウインドアンサンブル	有
8-10	合唱隊「群星」	有
8-11	ミュージック フレンズ	無

会員になる条件を設定している団体は、9団体のうち3団体であった。江戸川区音楽協議会に加盟する各団体では、11団体のうち8団体が条件を設定していた。具体的な条件としては、江戸川区内に居住／勤務していることや、年齢等があげられており、音楽団体においては、楽器経験があることや、母体となる組織（集団）の関係者であること等が会員になる条件となっている。

○会費

		会費
1	江戸川区美術会	有
2	江戸川区俳句連盟	無
3	江戸川区川柳作家連盟	有
4	江戸川区書道連盟	有
5	江戸川区華道茶道協会	有
6	江戸川区短歌連盟	無
7	江戸川区囲碁連盟	有(※)
8	江戸川区音楽協議会	有
9	江戸川吹奏楽団	有

〈江戸川区音楽協議会の加盟団体〉		会費
8-1	江戸川演奏家協会	有
8-2	江戸川ギター・マンドリンクラブ	有
8-3	江戸川区音楽祭合唱団	有
8-4	江戸川区PTAコーラス (a)	有
8-5	江戸川区PTAコーラス (b)	有
8-6	コール・フロインデ	有
8-7	音の会	有
8-8	江戸川ウインドオーケストラ	有
8-9	リコリスウインドアンサンブル	有
8-10	合唱隊「群星」	有
8-11	ミュージック フレンズ	有

9団体及び江戸川区音楽協議会に加盟する11団体の中で、会費の設定がないものは江戸川区俳句連盟と江戸川区短歌連盟のみであった（囲碁連盟は加盟団体によって設定無しのクラブもある）。

会費の種類は、自己負担の交通費、活動年会費、出品/出展/演奏会参加費用等である。

○活動に対する行政からの支援

団体活動に対する江戸川区からの支援の内容として記述された内容を整理すると、以下の5点に集約された。

- ① 会場費・付帯設備費の助成：
 - ・江戸川区文化祭をはじめとする大会、イベント、講座における施設使用料に対する助成
- ② 会場の優先予約・確保：
 - ・江戸川区文化祭をはじめとする大会、イベント、講座における会場施設の優先確保・予約
- ③ 展示会や講座における運営助成・補助：
 - ・江戸川区文化祭をはじめとする大会、イベントや展示会における会場設営・進行等の運営補助
- ④ イベントや作品募集等に関する広報：
 - ・団体の活動案内／演奏会等のチラシ印刷・配布、区ホームページへの掲載
 - ・俳句や短歌の全区的募集に関する広報
- ⑤ イベントにおける後援：
 - ・演奏会開催時の江戸川区後援名義の使用

○団体が抱えている課題

現在、団体が抱えている課題や困っていることとして記述された内容は、以下の6つの項目に整理された。

- ① 高齢化／若者の担い手不足
- ② 活動の質の低下
- ③ 事務作業の負担
- ④ 参加者の減少／他活動との競合
- ⑤ 活動場所に関する問題
- ⑥ 費用面での負担

なお、団体ごとの各項目に対する回答の状況は以下の表の通りである。

		高齢化／若者の担い手不足	活動の質の低下	事務作業の負担	参加者の減少／他活動との競合	活動場所に関する問題	費用面での負担
1	江戸川区美術会	●					
2	江戸川区俳句連盟	●			●		
3	江戸川区川柳作家連盟	●					
4	江戸川区書道連盟	●			●		●
5	江戸川区華道茶道協会	●					
6	江戸川区短歌連盟	●		●			
7	江戸川区囲碁連盟	●					
8	江戸川区音楽協議会	●					
9	江戸川吹奏楽団					●	

〈「江戸川区音楽協議会」の加盟団体〉		高齢化／若者の担い手不足	活動の質の低下	事務作業の負担	参加者の減少／他活動との競合	活動場所に関する問題	費用面での負担
8-1	江戸川演奏家協会			●			
8-2	江戸川ギター・マンドリンクラブ					●	
8-3	江戸川区音楽祭合唱団	●			●	●	●
8-4	江戸川区PTAコーラス (a)				●	●	●
8-5	江戸川区PTAコーラス (b)	●			●		
8-6	コール・フロインデ	●	●				
8-7	音の会						
8-8	江戸川ウインドオーケストラ				●	●	
8-9	リコリスウインドアンサンブル					●	
8-10	合唱隊「群星」					●	●
8-11	ミュージック フレンズ				●		

「高齢化／若者の担い手不足」とは、「会員のほとんどが70代、80代で先細りの状態」（江戸川区川柳作家連盟）という回答に見られるような、会員の高齢化と次世代の担い手となる若者・中年層の不足に関する内容である。本項目については、30～40代が一番多いと回答した江戸川吹奏楽団（no.9）以外の8団体（no.1～8）全てから言及があった。音楽協議会の加盟団体3団体からも同様の記述が見られた。

「活動の質の低下」とは、団員の高齢化により活動の質に影響が出ているとする内容であり、具体的には、音楽協議会の加盟団体であるコール・フロインデより「高齢化による読譜力低下」という記述があった。

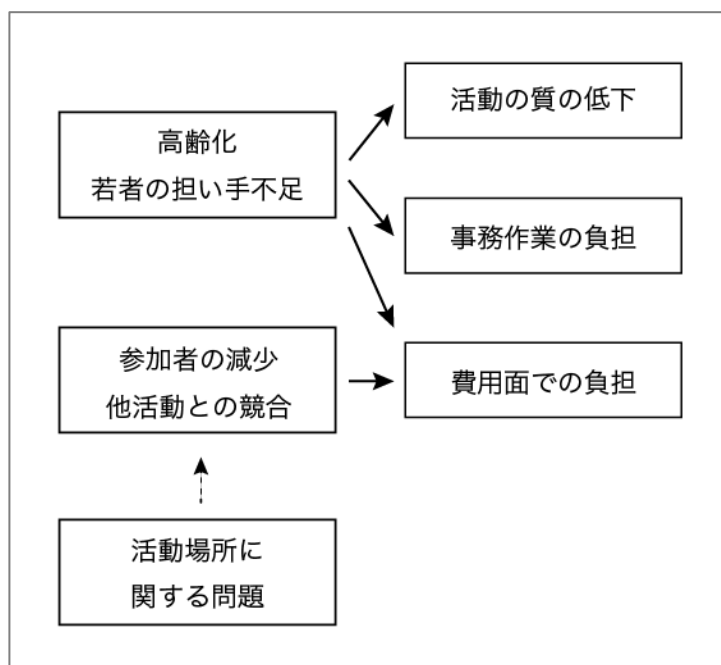
「事務作業の負担」とは、日頃の活動や演奏会等の本番における事務作業の負担に関する内容である。江戸川区短歌連盟からは「パソコンを駆使できる人が少なく、その担い手に仕事が集中してしまう」といった、「高齢化／若者の担い手不足」に関連した課題がきかれた。また、江戸川演奏家協会からは、コンサートに関する事務局の電話受付や、コンサート本番における様々な音楽事務作業の負担に関する記述があった。

「参加者の減少／他活動との競合」とは、高齢化に伴って体調不良等の要因により会員が減少していたり、新入会者が少なく構成人数が減少したりしていることへの危惧に対する内容（前者）と、同分野で同世代を対象に開講されている他講座（具体的には、カルチャーセンター等）との活動重複により、参加者が増えないことへの懸念に関する内容（後者）である。前者は音楽団体を中心に、後者は文化団体を中心に言及があった。

「活動場所に関する問題」とは、音楽団体を中心に記述されたものであり、定期演奏会の会場や日頃の練習場所の確保の困難さに関する内容である。特に、日頃の練習場所の確保については、「練習場所が（確保できるかどうかは）抽選によって決まるため、拠点が確保できずジブシー状態」（合唱隊「群星」）という声もきかれた。

「費用面での負担」とは、「高齢化／若者の担い手不足」と関わって、会員の高齢化に伴って業者への作業依頼等、費用負担が発生していることや、「参加者の減少／他活動との競合」と関わって、団員数の減少により団員一人一人の費用負担が大きくなっていることに関する内容である。

以上6点の課題は、それぞれが独立した課題として存在しているのではなく、互いに関連していることが示唆される。



具体的には、「高齢化／若者の担い手不足」は「活動の質の低下」、「事務作業の負担」、「費用面での負担」に関連し、影響を及ぼしていると考えられる。また、「参加者の減少／他活動との競合」も「費用面での負担」につながっている。

る側面がある。音楽団体を中心にきかれた「活動場所に関する問題」は、間接的に「参加者の減少／他活動との競合」に影響を及ぼしていると考えられる。

○団体活動継続のための自主的な取り組み

活動を継続していくために、団体が自主的に取り組んでいる内容として記述された内容を整理すると、以下の7点に集約された。

〈団内に向けた取り組み〉

- ① 団員同士の親睦を深めること
- ② 活動のレベルアップ
- ③ 団内活動で発生する諸作業の役割分担

〈団外に向けた取り組み〉

- ④ 新入会員（若い世代を含め）の勧誘／募集
- ⑤ 活動に関する広報活動
- ⑥ 区民に開かれた活動の展開
- ⑦ 新しい企画の構想・実施

〈団内に向けた取り組み〉としては、「練習以外に交流を持つなど、人間関係が良好になるよう努めている」（江戸川ギター・マンドリンクラブ）という記述にみられるような「団員同士の親睦を深めること」に関する内容と、「江戸川区少年少女合唱団団員の憧れの団体たるべく音楽的向上を努力目標にしている」（合唱隊「群星」）という記述にみられるような「活動のレベルアップ」に関する内容、そして、持続的に活動を運営していくために「団内活動で発生する諸作業の役割分担」の3点がきかれた。

〈団外に向けた取り組み〉としては、参加者の募集に関わる「新入会員（若い世代を含め）の勧誘／募集」、Web や SNS を活用した「活動に関する広報活動」の2点を中心に回答が見られた。また、「区民からの応募による勉強教室の開催」（江戸川区美術会）や「区民の方が気軽に立ち寄れるコンサートの企画を継続する」（江戸川演奏家協会）という記述にみられるような「区民に開かれた活動の展開」を志向する内容や、「若い人たち（特に小学生・中学生）に参加してもらうべく、すすすくスクールと連携」（江戸川区短歌連盟）という回答のように「新しい企画の構想・実施」に関する内容がみられた。

○区に求めたい支援

団体活動継続のために区に求めたい支援について質問すると、「現状のままの支援を継続してほしい」という回答が4団体(9団体+音楽協議会の加盟団体11=合計20団体のうち)よりあった。他方で、各団体の活動状況に照らして、支援の拡充や改善等の要望もきかれた。記述された要望の内容を整理すると、複数の団体より共通して指摘された内容が3点あり、具体的には「子ども／若者世代との接点の創出」、「人材の掘り起こし・活用・接続」、「施設の予約方法の改善」である。

「子ども／若者世代との接点の創出」とは、「今後若い人を育てるべく、小学生、中学生、高校生など交流できる場があればよいと思う」(江戸川区短歌連盟)という回答にみられるように、団体活動のさらなる普及・発展に向けて、子どもや若者世代とつながる接点を区の支援により生み出していきたいという内容である。「人材の掘り起こし・活用・接続」とは、「埋もれている人材の掘り起こし(やりたいのにできないでいる人、意識の高い人)」(コール・フロインデ)という回答にみられるように、文化活動へ参加したくてもアクセスできずにいる人を掘り起こし、団体活動と接続する役割を区に求めたい、とする内容である。「施設の予約方法の改善」では、大会や演奏会等のイベントのみでなく、日頃の練習・活動に対しても施設予約を行いやすくしてほしいという内容と、区の団体に対する優先予約の実現の対する要望がきかれた。

5-2. 文化団体会員へのアンケート調査 概要と結果

(1) 調査の概要

・調査の目的：

文化団体に所属する会員が活動の中で感じる「面白さ」や「やりがい」、一方で感じる活動を続ける上での「困難さ」等を把握することで、文化芸術活動の持続的な運営に対し区が担うべき支援を明確にすること

・アンケート実施時期：

2023年12月～2024年1月にかけて実施

・アンケート実施方法：

Google フォームによるオンライン回答

・アンケート項目：

所属団体名、年齢、所属年、所属したきっかけ、活動の中で感じる「面白さ」や「やりがい」（活動を継続している理由）、活動を続ける中で感じる「困難さ」

・回答数（所属団体）：

40名（12団体）

回答者数の内訳

	団体名	分野	回答者数
1	江戸川吹奏楽団	音楽	16
2	江戸川ギター・マンドリンクラブ	音楽	10
3	江戸川区書道連盟	書道	3
4	江戸川区美術会	美術	2
5	西葛西川柳教室	川柳	2
6	江戸川区短歌連盟	短歌	1
7	福柳会	川柳	1
8	瑞穂句会	俳句	1
9	青芹社	書道	1
10	日本画菘の会	美術	1
11	コール・フロインデ	音楽	1
12	楽夢音	音楽	1

(2) アンケート集計結果

○団体に所属したきっかけ

入団のきっかけとして記述された内容は以下の5点に集約された。

団体に所属したきっかけ

内容	回答者数
指導者や友人からの紹介	16
活動に興味があったため	9
活動が続けられる場がほしかったため	6
近隣に活動場所があったため	5
職場以外の交流の場を求めて	1
その他	4

※複数回答

回答がもっとも多かったものは「指導者や友人からの紹介」であった。次いで、「活動に興味があったため」、「活動が続けられる場がほしかったため」、「近隣に活動場所があったため」と続いている。

○活動を継続する中で感じる「面白さ」や「やりがい」(=活動継続理由)

活動を継続する中で感じる「面白さ」や「やりがい」として記述された内容を整理すると、以下9つの内容に分類できた。

活動を継続する中で感じる「面白さ」や「やりがい」

内容	回答数
楽しさの再発見	17
メンバーとの交流の深まり	16
発表機会の充実	7
活動できる喜び	6
上達の実感	3
レパトリーの広がり	2
活動への貢献性	2
指導する面白さへの気付き	1
指導者の熱意	1

※複数回答

もっとも多く回答がみられたのは「楽しさの再発見」に関する内容である。再発見される「楽しさ」の内実は活動によって様々であろうが、具体的な記述を見ると「皆で音楽を作り上げる楽しさ」（江戸川ギター・マンドリンクラブ）、「日常・季節の変化に気づき句作りをすること」（瑞穂句会）等とあり、例えば、アンサンブルで行われる音楽活動であれば人と合わせること＝合奏することの面白さへの気付きに関する内容、書道や短歌・俳句等の会員同士で切磋琢磨しながら自信の感性を磨いていく分野の活動においては、創作における視野の広がりに関する内容の言及がみられた。

次いで多く回答がみられたのは「メンバーとの交流の深まり」に関する内容であり、「異業種の方との接点・年代を超えた仲間ができる」（江戸川区書道連盟）、「幅広い年齢層の方々と交流ができる。職場以外での友人ができた」（江戸川吹奏楽団）といった回答がみられた。

「発表機会の充実」とは、発表の場があることがモチベーションにつながっているという趣旨の内容である。「活動できる喜び」とは、好きで続けている活動を今もなお継続できることに対する喜びである。

継続年数別 活動を継続する中で感じる「面白さ」や「やりがい」

内容	活動継続年数		
	～5年	6～15年	15年～
楽しさの再発見	5	6	6
メンバーとの交流の深まり	7	3	6
発表機会の充実		4	3
活動できる喜び	1	2	3
上達の実感	2	1	1
レパートリーの広がり	1	1	
活動への貢献性	1	1	
指導する面白さへの気付き			1
指導者の熱意		1	

活動を継続する中で感じる「面白さ」や「やりがい」として記述された9つの内容について、活動継続年数ごとに回答数を集計したものが上記の表である。回答者40名の活動継続年数の平均を算出すると15年であったため、集計にあたっては～5年／6～15年／15年～の3段階で区分することとした。

入団したて～継続5年以内の団員の回答傾向をみると、「メンバーとの交流の深まり」に関する回答がもっとも多く、次いで「楽しさの再発見」に関する回答が多くみられた。継続6～15年の団員では、「楽しさの再発見」に関する回答

がもっとも多く、次いで「メンバーとの交流の深まり」、「発表機会の充実」と続いている。15年以上活動を継続している団員では、「楽しさの再発見」と「メンバーとの交流の深まり」に関する回答が同点でもっとも多く、次いで「発表機会の充実」「活動できる喜び」となっている。これらからは、1) 新入団員は趣味を同じくする新たな仲間に出会い、その交流を深めていくことに面白さを感じる傾向にあること、2) 中堅（継続6～15年の団員）以上の団員にとっては、発表の機会が充実していることがモチベーションを保つ一つの要因になっている傾向にあること、3) 15年以上活動を継続している団員では、メンバーとの交流の深まりに加え、活動を継続できていること自体に対する意義深さを感じる傾向にあることが示唆される。

○活動を継続する中で感じる「困難さ」

活動を継続する中で感じる「困難さ」として記述された内容を整理すると、以下6つの内容に分類できた。

活動を継続する中で感じる「困難さ」

内容	回答数
活動場所に関する問題	15
練習／創作時間の確保	13
参加者の減少	11
団員の高齢化／若手不足	7
実力・体力の不足	3
費用面での負担	2
※複数回答	

もっとも多く回答がみられたのは「活動場所に関する問題」に関する内容である。本項目については主に音楽団体の団員より記述があり、「団としての練習場所が、毎回えどねっとの抽選に頼っているのが不安定」、「毎年定期演奏会の会場の確保が年々難しくなっている」、「練習場所の確保が他団体とバッティングすることによりどうしても夜間帯の時間が多くなり大変」といった声がきかれた。これは文化団体代表者へのアンケートでも指摘された内容である。

次いで多く回答がみられたのは「練習／創作時間の確保」に関する内容である。具体的には、仕事や家庭の時間との調整をしながら活動を継続することに対する困難さに関する言及がみられ、音楽活動に従事する団員からは「家で音が出せ

ないので、施設を借りて自分の練習時間を確保するのが大変」といった声もあった。

続く「参加者の減少」、「団員の高齢化／若手不足」に関する内容も、文化団体代表者へのアンケートで同様に指摘されたものである。

このようにみると、活動を継続する中で感じる「困難さ」については、「練習／創作時間の確保」といった団員自身に関係する課題よりも、「活動場所に関する問題」や「参加者の減少」、「団員の高齢化／若手不足」といった団として抱える課題に対し、会員がより困難さを感じていることがわかる。

5-3. 文化団体へのヒアリング調査 概要と結果

(1) 調査の概要

アンケート調査を実施した江戸川区内で活動する文化団体のうち、7団体（文化団体4団体及び音楽団体3団体）の代表者を対象に、ヒアリング調査を行った。なお、ヒアリング調査は2回実施し、文化団体4団体の代表者を対象とした調査を2023年11月29日に、音楽団体3団体の代表者を対象とした調査を2023年12月16日に行った。

ヒアリング調査実施の概要

■ 対象者

- ・文化団体：江戸川区華道茶道協会、江戸川区書道連盟、江戸川区短歌連盟、江戸川区囲碁連盟
- ・音楽団体：江戸川区音楽協議会、江戸川吹奏楽団、江戸川演奏家協会

■ ヒアリング項目

活動の状況、団体が抱えている課題、区に求めたい支援 等

ヒアリング調査の実施にあたっては、先行して行ったアンケート調査の回答をもとに、ヒアリング項目に関わる概要を把握した上で、その具体について聞き取りを行った。

(2) 分析結果

各団体から語られた内容を整理すると、団体が抱える課題や今後の活動に対する展望には共通項が見られた。

① 共通課題としての「高齢化／若者の担い手不足」

「高齢化／若者の担い手不足」への課題意識は、代表者を対象としたアンケート及び団員を対象としたアンケートでも同様に指摘された内容である。江戸川区文化会理事長／江戸川区書道連盟理事長の根田雅風氏は、「高齢化／若者の担い手不足」について、以下のように語った。

書道連盟（根田）：

年齢的に上の世代の人たちが続けていて、そのままスライドして高齢化が進んでいると。（中略）何かやろうという時に、やはり壮年、若年の人がいないと困る面が多い。例えば、書道というのは、筆を持って書いているだけ

じゃなくて、机も動かすし、椅子も動かすし、会場も作らなきゃいけない。力作業がある。お年寄りばかりになってしまうと危ないので、あまりやらせられない=やらない、ということで活動の縮小につながってしまう。(中略)また、高齢化が進むことによって、コスト的にも非常に負担になってきている。例えば、会場設営を業者に頼むとして、会費がそこに消えていくことに対するジレンマが起きている。

書道連盟に所属する会員は、60～70代がもっとも多いため、根田氏が語るように、年齢の高い会員のみで展示会等の会場設営作業を行うことは、体力面・安全面からも非常に困難さを伴う。「危ないので、あまりやらせられない=やらない、ということで活動の縮小につながってしまう」という言葉からは、会員の高齢化に起因し、活動規模の縮小へつながってしまうことへの危惧が窺える。また、会場設営作業等を業者に依頼することに対して「会費がそこに消えていくことに対するジレンマ」と語っており、高齢化に端を発し、さまざまな課題が関連して生じている現状がわかる。

「若者の担い手不足」をめぐっては、江戸川区文化会会長／江戸川区華道茶道協会理事長の石田宗明氏より、カルチャーセンター等の活動との競合により、参加者が減っていることや、若者の文化活動に対する意識の違いについて言及がなされた。

華道茶道協会（石田）：

若い人がなかなか（会員に）ならない。師範とかを取らなくなった。（中略）先生のところでのお稽古は金額も高めだが、カルチャーセンターでは数千円で教えてくれる。師範まで行かなくてもいい、ただ楽しみでやる、という人が結構多い。

石田氏は、華道茶道協会においても指導者の高齢化が進み、次世代を担う若者の参加が課題である中、「師範まで行かなくてもいい、ただ楽しみでやる」という若手世代が多いという印象を受けていると語った。その背景には、カルチャーセンター等で安く習える環境ができていることも関係していると指摘する。

華道茶道協会（石田）：

（カルチャーセンターでやっていることと、協会の個々のお教室でやっていらっしゃる活動とで大きく違いはあるのでしょうか、という問いに対して）

全然違いますね。私はお茶ですけど、私たちは免許で教えるので。お点前であるんですけど、カルチャーセンターでは一番最初のお点前しか教えな
いと
か。

初心者への入門講座を主とするカルチャーセンター等での講座と、協会に所属する指導者たちが主催する個々の教室でのお稽古とは内容に違いがある。華道茶道協会では、現在、初心者教室、茶の湯講座、親子教室等の講座を文化課と連携し展開しているとのことだが、参加者のニーズを捉えて講座を展開していくことに加え、その文化活動の奥深さに触れ、より一層高みを目指したいという参加者の思いを掘り起こし、然るべき活動場所へつないでいくことも必要とされるのではないだろうか。

他方で、「高齢化／若者の担い手不足」に関し、音楽協議会会長の根本秀樹氏は以下のように語っている。

音楽協議会（根本）：

音楽協議会がつくった団体というのが、もうそれこそ30年ぐらい前にできたものがたくさんあって、それが皆さんも、私たちもですけど、30歳みんな年取っちゃったぞって。そういう構図ですかね。（中略）吹奏楽連盟は、おかげさまで、結構若い方いっぱいいます。中学校から吹奏楽をやって、その方たちが社会人になり入ってきたりとかって多いんですけども、その他のサークルに関しては、一度もうできてしまうとその人間でこう固定されてしまって、そのままずっと年取っていく、みたいな構図がなんとなくあるんですよ。

ここで指摘されていることは、特に人間関係においても、設立当時のままの形で団体が存続しており、そのために、一度できてしまった人間関係のまま、メンバーの入れ替わりがあまり起きずに「固定」化されている、ということである。メンバーが固定化され、入れ替わりが起きなければ、それは必然として「高齢化／若者の担い手不足」につながるであろう。このようにみると、団体における人間関係の固定化は、大きな括りでは、団員の高齢化と若手メンバーの不足という課題として認識されるが、その課題の根本は、団の在り方にあり、開かれた、多世代が参入しうる形に変容する必要が指摘されるのではないだろうか。

② 子ども／若者世代をターゲットにした取り組みの模索

各団体より、団員の「高齢化」が共通課題としてきかれた一方で、子どもや若者世代をターゲットにした取り組みを模索している事例もきかれた。

例えば、江戸川区囲碁連盟（理事長：田島弘資氏）では、主に高齢者が活動している囲碁クラブの活動に加えて、小学生を主な対象とした子ども向けの入門教室を開講している。入門教室の案内は江戸川区内の小学校全校へ配布しており、現在は親子で参加する形で実施しているという。

囲碁連盟（田島）：

最初は親子を対象とした講座ではなかった。文化庁の助成に申請する関係で親子でやってみたところ、案外良かった。親子の方がその後活動を継続している。（中略）入門教室は全3回の講座。1回目、2回目と入門教室を別の日で2日やって、あとミニ大会をやって、その3回でクリアする。それでそこは終わりにして、あとは連盟に所属の会員が子ども教室をやっているため、そこを案内して、続けたい人はそこに受け皿を設定している。

囲碁連盟では、子ども向けの入門教室を親子で参加として3回設定し、その後も続けたいという参加者には囲碁連盟の会員が主催する教室で活動を続けるよう促していく素地ができあがっている。他方、音楽でも、子どもを対象とした事業に参画している事例（ユースバンド子供事業）がきかれた。

短歌連盟からは、コロナ禍に始めた取り組みをきっかけに、小・中学生向けの取り組みを検討しているという発言があった。

江戸川区短歌連盟（長谷川）：

今の活動状況だと、大人向けのいわゆる講演会が中心。区民から歌を募集し、区民の方の歌の一首一首を公開していただくという形になっている。ただそれも高齢化でどんどん参加者が減っており、なかなか増えていかない。

（中略）昨年はコロナのこともあり、初めて展示という形で発表したところ、すくすくスクールや共育プラザには短歌をやりたいという若い人が結構いることがわかった。（中略）講演会（勉強会）だと、短歌愛好者のためということになり、当然、高齢者の人たちの集まりになってしまう。これには小学生たちには応募してもらえないことになる。今後、小中学生向けの講座みたいなものを展開していきたい。

コロナ禍において従来通りの活動が制限を余儀なくされ、新たな試みとして「展示」形式での発表を実施したところ、想定外に、小・中学生から作品の募集があり、江戸川区短歌連盟委員長の長谷川紫穂氏自身も驚く結果になったとのことである。作品批評を伴う講演会ではなく、作品を「展示」という形式であれば、様々な年代の短歌愛好者が、無理なく活動に参入することができると考えられる。短歌連盟におけるこの事例は、新しい企画の検討・実施により、従来の活動の範囲では見えなかった参加者とそのニーズとの接点を見出し、活動に新たな展開と方向性が生まれた事例である。

ただ、一方で、子どもを対象とした際には、お稽古事の多様化や受験等により、活動の継続が難しい現状もある。

書道連盟（根田）：

入会する人数も少なくなっている。それはどこの趣味の世界も同じではないか。時間的な面と、自分の体の面、それから経済的な面。その3つがそれぞれ足枷になる。そうすると続かない。子どもたちを中心に教えていると、受験でやめてしまう。この子たちを育てていきたいと思う時点で、いなくなってしまう現実がある。

子ども／若者世代をターゲットにした取り組みを検討する中で、大事にしたこととして共通にきかれたのは、その文化活動の本質に触れることの重要性についてであり、その文化・芸術の持つ美しさや本質を見失わずに活動を展開したいという思いである。ここでは、江戸川区吹奏楽団と江戸川区短歌連盟の発言を引用する。

江戸川区吹奏楽団（石原康裕）：

今の中学校の子たちがプロの音楽家の技量とはどれだけすごいのか、きっと分かっていないのではないか。近所のおじさんが楽器を教えているのはレベルが違う。（中略）プロやプロを目指す人たちの音楽に触れる機会をつくることができるといい。これがプロのレベルなんだ、プロを目指す人の音楽のレベルなんだと、そういうのに触れさせないとダメなんだと思う。

江戸川区短歌連盟（長谷川）：

若い人はもう紙ではなくてネット。短歌は31音しかないのに、ネットを駆使してやるという方法もあるが、受け入れ体制がこちらにない。例えば、ネットで短歌を募集したら、それこそ江戸川区内だけでなく、もっといろんなところからも募集ができるのではないかという展望はある。ただ、短歌とは、

本当は口で詠む、歌である。口で言って美しい。もちろん内容も重要だし、見て美しいことも重要。この3つがそろっていないと本当は短歌ではない。今はネットに載ってしまったら内容だけが重視される。短歌そのものの叙情みたいなのが変わってくるのではないか。

これらの発言からは、子ども／若者世代を念頭に、プロの活動に触れる機会をもつことの意義と、文化・芸術の本質を失わず活動を展開していくことの重要性がみてとれる。

子ども／若者世代だけに限らず、文化活動にアクセスしようとする人々の文化活動への興味・関心をより一層喚起し、活動を通してその文化・芸術の奥深さに触れることで、文化活動に従事することの価値を実感として高めていくことが必要なのではないだろうか。

③ 活動しやすい環境づくり：施設の予約・確保の改善等

区内で文化活動を実施・展開しやすい環境づくりに対する声も、共通した要望としてきかれた。具体的には、施設の予約・確保における困難を解消／改善してほしいという要望がきかれた。

江戸川区吹奏楽団（石原）：

吹奏楽などの合奏形態のバンドの練習場所が限られている。区内施設で「演奏音量大」といわれる指定がついているものは、グリーンパレスのホールと総合文化センターのリハーサル室、タワーホール船堀のリハーサル室。区民館でいうと、東部区民館と、清新町コミュニティ会館。この5箇所しかない。練習日である土日の朝昼晩6コマは争奪戦になってしまう。（中略）また、江戸川区は参入障壁が低く、費用の安さから他区からの楽団も流入しやすい状態になっており、ますます練習場所の競争率が高くなっているというのが実情。（中略）特にオーケストラでは、打楽器類がないと演奏ができない。打楽器類が揃っていて練習ができる場所というと、潤沢に楽器があるのは総合文化センターくらいしかなく、本当に限られてしまう。他の会場での練習の際には、トラックで楽器を運んで練習をするしかない。

江戸川区内の施設利用に関しては、音楽団体を中心に、施設予約における江戸川区枠の設定等、具体的な改善要望がきかれた。

他方で、既存する施設を文化活動にうまく活用できている事例もきかれた。例えば、タワーホール船堀の1階展示ホールは天井が高いという特徴があるため、

書道の縦に長い作品も展示に活用できている。また、自然動物園の横の日本庭園内にある源心庵には茶室があり、この茶室を活用した茶の湯を楽しむ会も盛況だという。一昨年からは「えどがわデジタル美術館」と題したホームページが公開され、美術・書道分野を中心としたアート作品に触れられる機会が設定されている。

④ 演奏会・展示会等のイベント実施時に発生する事務作業等の負担

江戸川区音楽協議会の加盟団体として位置付けられる江戸川演奏家協会代表の古宮朋子氏からは、演奏会・展示会等のイベント実施時に発生する事務作業等の負担について、以下の発言があった。

演奏家協会（古宮）：

演奏家協会は会費で成り立っている。誰かを雇う余裕はなく、コンサートのときなどは担当者／有志で電話の受付、チケットの発送等を行っている。出演する演奏者には、演奏に集中してほしいため、音楽事務作業の負担を負わせることは厳しい。協会に所属している若手は、ボランティアでは動いてはくれない。そのために、上の世代が事務作業の負担を負っているが、持続可能な形ではない。

上記の発言を受けて、東京藝術大学 藤崎教授からは文化的なボランティアに携わる「文化リンクワーカー」を育成していくことが提案され、音楽協議会会長の根本氏、文化課安田健二課長からも発言があった。

藤崎教授：

文化的なボランティアというのかな、「文化リンクワーカー」みたいな形の組織みたいなのがあって。別に音楽だけじゃなくても、いろいろな他の文化団体の活動に対して、受付だけでもいいからやってもらえるような。組織とかできたらいいのかなって、話を聞きながらと思いました。自分たちの中だけで全部やろうと思うと無理なのでね。（中略）アートだとアートコミュニケーター、科学だとサイエンスコミュニケーター。そうやって、専門職みたいな形に移行していく。やることは受付係なのかもしれないけれども、文化活動ってこういうことが大事でとか、マネジメントのことを勉強したりとか。それで、自分が文化に貢献してるんだって思える。そういうことができたりすると、少しは参加する人にもやりがいが出てくるかもしれない。

音楽協議会（根本）：

江戸川には総合人生大学というものがあるんですが、授業の一環としてボランティア活動みたいなものがあり、音楽協議会の音楽祭にはその方たちがボランティアでお手伝いに来てくださっている。「文化リンクワーカー」というようなことを総合人生大学の中でも広めていただいて、芸術に対するボランティア活動みたいなものに対し人を募るというのもいいのかなというふうに感じた。

江戸川区（安田課長）：

今お話があった総合人生大学については、卒業してから様々な活動をするというところで、100 団体近い人たちが様々なボランティアとして、外国人との交流、料理など本当に様々な分野で活躍されている。ただ、個別に動いているため管理はできていない状況である。今後、そのボランティアをある程度まとめていくことを考えていく上で、音楽団体に対しても、何かご協力いただけることもあるかもしれない。

5-4. 考察：次年度以降へ向けた提言

アンケート調査及びヒアリング調査を通して、文化団体より語られた内容をまとめ、江戸川区及び東京藝術大学が行うべき支援と取り組むべき課題について考察し、以下6点を提案する。

〈文化団体が抱える課題からみる提言〉

1. 若い世代を文化活動へ巻き込んでいく取り組みの推進
2. 文化活動に参加したい人がアクセスできるルートづくり
3. 開かれた活動への後押し
4. 発表場所や練習場所の増設、及び施設の予約方法等の改善
5. プロの領域に触れる機会の設定
6. 文化的なボランティア、文化リンクワーカーの人材育成

1. 若い世代を文化活動へ巻き込んでいく取り組みの推進

各文化団体が抱える共通課題は、「高齢化／若者の担い手不足」にある。団体での文化活動を持続的に次世代へつないでいくためには、子どもを含めた若い世代をいかに文化活動の場へ呼び込み、巻き込んでいけるかが鍵となる。今後の活動運営にあたっては、多世代がともに参加できるような手立てを工夫したり、「親子」を対象とした講座の実施等を検討することが必要であろう。また、次項とも関わって、文化活動に参加したい人がアクセスできる環境づくりも同時に必要であろう。

2. 文化活動に参加したい人がアクセスできるルートづくり

「若手世代の参加者が少ない」という声がきかれたが、それは若手世代が各文化活動へ興味・関心をもっていない、ということとイコールではない。文化活動に興味・関心をもち、参加したいと希望している人たちが各文化活動へアクセスできるルートが用意され、また同時に、もっとその文化の本質に触れたい、上達したい、師範代をとりたい、等のモチベーションが生まれた参加者が、その希望がかなう活動に接続される仕組みが必要である。各活動が接続され、文化活動がより広がっていく土台がつくられていくことは、参加者たちが自身の文化活動により主体的に関わることを促進することにつながり、文化活動に対する意識の底上げにもつながっていく可能性がある。

3. 開かれた活動への後押し

団体が長く活動を続けていく中で、所属する団員が固定化されていってしまうという課題に対しては、多世代が活動に参入し、活動を継続していけるような「開かれた」活動の在り方が求められる。「開かれた」とは、新入団者が受け入れてもらえる雰囲気であり、団員同士がオープンに意見交換・対話ができる関係性であり、あるいは、ライフステージの変化に応じて、活動を休んだり／再開したりできるような柔軟な組織運営であるかもしれない。各団体活動が「開かれた」活動となるよう後押しする必要があるだろう。

4. 発表場所や練習場所の増設、及び施設の予約方法等の改善

団体活動（練習場所）の拠点が固定されていることは、所属している団員にとっても、団体運営においてメリットが大きいと考えられる。団員へのアンケートにおいて、入団のきっかけの1つに「アクセスのしやすさ」があったように、活動に興味をもち、団体活動に参加しようと考えている人にとっては、活動拠点が決まった場所であることは、活動への参入を後押しすることにつながる可能性がある。また、現在活動を続けている人にとっても、固定された活動場所の拠点があることは活動継続を支えることにつながる。

日頃の練習や発表会等のイベントを含め、施設の予約・確保に関しては、既存の施設については区内の団体に対する優先枠の設立等を検討する必要があるだろう。ただし現在活用されている施設の予約方法等だけを議論するのではなく、現在活用されていない資源の掘り起こし等についても合わせて検討する必要があるのではないだろうか。

5. プロの領域に触れる機会の設定

文化活動に従事する人々にとって、憧れたり目指したり存在として、その活動のプロたちの技に触れる機会は重要であろう。例えば、音楽分野に関しては、藝大奏楽堂でのコンサートに「江戸川区粋」の優先座席をつくる等、連携による取り組みの在り方を検討することも可能ではないか。子どもを含めた江戸川区民がプロの演奏にアクセスできる環境をつくることで、音楽に対する「感性」と「耳」を育てていくことにつながり、それは区内における音楽活動の下支えと発展に貢献しうると考える。なお、本項目は、長期的な目線では、プロの作品や感性に触発されながら、区民がともに芸術・表現活動に参加することのできる、新しい芸術の形を志向する「アートコモンズ＝共有財」づくりにつながることである。

6. 文化的なボランティア、文化リンクワーカーの人材育成

団体活動においては、様々な事務作業等が発生しうる。その事務作業の負担を団員のみで背負い、運営していこうとすると、団員の高齢化や減少により、持続が難しくなってしまう。この課題に対しては、文化的なボランティアに従事する「文化リンクワーカー」を育成することが解決への糸口となる可能性がある。文化リンクワーカーの存在は、文化団体にとっては運営の助けとなり、翻って、文化リンクワーカーに従事する人本人にとっては、文化活動への貢献を通じた多様な人との触れ合いが「生きがい」や「やりがい」に通じていく。「人生 100 年時代」という言葉がすでに一般化した現在において、文化活動への様々な形でのアクセスは、人々がよりよく生きることや、健康寿命を延伸させることにつながるはずである。文化活動を通して人と人同士がつながっていくこと、それは、東京藝術大学が取り組む「文化的処方」の概念に通じるものである。

おわりに：次年度に向けて

江戸川区を歩くと、至る所にブルーの背景に白い文字の看板がある。共育プラザ、すくすくスクール、なごみの家、公園の所在を示すその看板は、この区がいかに区民に寄り添いながら子育て支援や教育、福祉介護、居心地の良いまちづくりに積極的に取り込んでいるかの証左でもある。文化というと芸術や文学の産物をイメージしがちだが、まちに暮らす人びとの生活そのものが文化であり、スマホで連絡し合うのも、コンビニで買い物するのも、河川敷で野球をするのも、日暮れ時に親水公園で犬の散歩するのも、ビニールハウスで小松菜を育てるのも、子育てするのも、高齢者をケアするのもみんな文化である。では、アートとか美術とか音楽とかいわれる、東京藝術大学が得意とする「芸術という文化」は、そうしたいわゆる人びとの行動様式という意味での広い意味での文化と何が違うのか？ おそらく芸術は行動変容や感覚変容を起こす力をもっており、暗い気持ちを明るくさせたり、いままでとは違った角度から日々の生活を見つめ直したり、自分たちの生活文化がかけがいのないものだとすることを認識させたり、自分のなかに眠っていた感性や才能に気づくきっかけになったりすることができる。

これから始まる『ともにアート』プロジェクトも、大きな青い看板になって、江戸川区のまちかどのどこかに忍び込み、区民の生活に寄り添いながら芸術によって人をつなぐ地域に欠かせない存在になりたいと考えている。本年度はそのための準備のリサーチやキックオフイベントを行った。斉藤区長と日比野学長との対話からは、芸術を多くの人により身近な存在にすることでお互いに協力できることがたくさんあることを確認できた。文化団体のリサーチからは会員の高齢化などの問題点が浮かび上がる以上に、江戸川区で組織的に充実した文化活動が行われていることがみえてきた。また、なごみの家と共育プラザの協働ワークショップでは、既存の組織に横串をさすことで多世代交流が可能であることを示すことができた。

次年度は、旧第二松江小学校の活動拠点をどう使っていくのか、そして将来的に子育て世代をターゲットにしたアートコモンズ構想をどう作っていくかを考える1年になる。もちろんワークショップや展示やレクチャーなどで、東京藝術大学の江戸川区での活動を外部への発信を行っていく予定だ。

江戸川区民がともに助け合い、ともに成長し、ともに楽しく生きることをお手伝いするために、芸術の力をどう使っていくか。これからの皆さまとともに進んでいく『ともにアート』プロジェクトを宜しくお願いいたします。

(藤崎圭一郎／東京藝術大学デザイン科教授、『ともにアートプロジェクト』研究代表)

江戸川区×東京藝術大学
令和5年度
連携事業実施報告書

制 作：東京藝術大学
発 行：2024年3月31日
報告書作成：萩原史織
印 刷：東京カラー印刷



TOKYO
GEIDAI



ともに、生きる。
江戸川区

表紙・裏表紙撮影：石川真悠